
記憶がないっ！

相馬正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶がないっ！

【Nコード】

N2921W

【作者名】

相馬正

【あらすじ】

目が覚めると、記憶が失われていた。唯一覚えていたキーワードは“秘密”。携帯に残された履歴を頼りに、親しいと思われる5人に近付いてゆくのだが…。 火曜・金曜7時更新の全5話（26部予定）です。

第一話 記憶がないっ！

「このことは絶対に秘密よ。約束だからね」

「わかった」

……

……

…

ドサッ

「いつて」

顔と腰に軽い痛みが走った。

んああ？ ベットから落ちたのか。

薄らばんやりとした中、這うようにベットに戻る。

さっきのは夢…か。なんか意味深だったよな“秘密”とか言っても…秘密ってなんだっけ？ 確か場所は河原で、二人が立ってて…、相手は…誰だった？

あれ？ いや、待てよ？

そんなことより…、ええと…、なんて言えはいんだ？

そうだ“自分”！ 自分はいつたい…誰なんだ？

記憶が…ないっ！…！

「くぁっ！」

ショックの反動で上体が起き上がった。

「っ」と

勢い余ってまたベッドから落ちそうになる。

「最悪だ。 “ 自分は誰だ？ ” なんて…そんなのありか？」

完全に目が覚めて二度寝どころじゃない。ベットから足だけおろし、目の前を見るとすぐに次の衝撃が…。

「ちよっ…、ここどこだ？」

駄目だ、ちよっとしたパニックだ。とにかくひとつずつ整理しないと。

「まず、ここはどこか？」

ここは六畳ほどの部屋で、机、ラック、洋服棚、そして今自分が座っているベットがある。

このベッドに一人で寝ていたとすると、十中八九ここは自分の部屋……だよな？

いや、知人の家に泊まりにきている……、なんて可能性もありか。待て待て、そんな可能性まで言い出したらきりが無い。この部屋を出れば嫌でも判るんだ、ここがどこかなんて大した問題じゃない。

「じゃあ、自分は誰なのか？」

そうだ、これこそ問題だ。自分の名前が判らない、どんなやつかも思い出せない。

さつきから“自分”、“自分”って違うよな？ 普通は自分のことを“僕”とか“俺”とか言うハズだ、それすらも判らない……。

ゾクッ

急に身震いした。気付くと体中からいけない汗が噴き出していた。

「これって、寝汗……なわけないよな」

まさに、えも言われぬとはこのことだ。頭では理解できなくても体は直感的に危険信号を発してるんだ。

駄目だ、取り乱しちゃいけない。とにかく一度冷静になろう。

「ふうー」

静かに深呼吸した。

落ち着け、一時的に混乱しているだけかもしれない。人の名前を忘れたり、「ナ」行が一つ出てこなかったり、よくあることだ。今はとにかく情報を集めよう。

何かギツカケになれば、ポーンと全て思い出して元通り…。

そうだ、きっとそうに違いない！

大丈夫だ問題ない。そう自分に強く言い聞かせた。

―自分に関する情報を探そう―

改めて部屋を見回した。

飾り気のない殺風景な部屋だ。テレビやオーディオ、パソコンといった家電の類がひとつもない。それだけじゃない、本やマンガ、ゲームといった趣向が判りそうなものすら何もない。いや、無趣味と

だとすると、自分は結構いい歳なんじゃないか？ そう思った矢先、壁に掛かっている服を見て目を疑った。

「これは、学校の制服？ ってことは学生！？」

部屋のドアの横に全身が映せる大きな鏡がある。近付いて恐る恐る鏡を覗き込んだ。

そこには確かに学生…、おそらく高校生くらいの男の子が立っていた。

「これが…自分の姿」

まじまじと下から全身をなめる。自分で言うのもなんだが、スラッ

としていてカッコいい。顔つきがちょっと軟派な感じもするけど、切れ長な目をしたいわゆるイケメンがそこにいた。

鏡の中にいる見ず知らずのイケメンは、手を動かしたり首を動かすと、自分の思い通りに動く、まるで操り人形でも動かしているような不思議な感覚だ。

そういえば昔、人の中身が入れ替わるストーリーの映画があったなあれも確か学園ものだった。やっぱりこういうことって多感な年頃に起こったりするもののかな。

学園…？ そうだ、生徒手帳！

さっきの制服に手を伸ばし、ポケットの中を全て探した。しかし、何も入っていない。机の中も探したが、ここにも入っていない。おかしい…、生徒手帳どころか何もなし。学生っていうには持ち物がなさ過ぎやしないか？

手掛かりのないまま時間だけが過ぎる。未だ自分の名前すら判らない。

そうこうしているうちに、カーテンの隙間から明かりが射し込み始めた。時計に目をやると針は7時前を指していた。

学生だったらもうすぐ登校しないといけない時間だ。だけど、今日が何曜日かも判らない。平日？それとも休日？どちらにせよ、この部屋に手掛かりがない以上、外に出るしかない。

ここにずっと引き籠つても、いつか誰かが入ってくる。とてもじゃないがそれこそ恐ろしい。

―外へ出よう―

ドアノブに手をかけると、その手は汗ばんでいた。

ただドアノブを回すだけなのに、今までこんなに勇気が要ったこと

があつただろうか。

「今まで”って？　そもそも今より前の記憶なんてないし」

ふと発した一言、“今まで”って、冗談か？

この状況で自分が冗談を言うとは…、それがとてもおかしく思えた。

ほんの小一時間とはいえ、その僅かな行動の積み重ねが気持ちにゆとりをもたらしたのなら…、いろいろ経験することは記憶を呼び覚ますキツカケになるんじゃないか？

自然と制服に手が伸びる。

「学校…行ってみよう」

シャツにズボン、ブレザーを順に着て、改めて鏡の前に立った。

「って！　茶髪かよっ！？」

さっきは薄暗くて判らなかったが、真っ先に茶色い髪が目に入った。それにこのだらしなく着くずした制服姿はなんだ？　もしかして、自分は少々“やんちゃ”なんじゃないだろうか？

「よし！　一人称は“俺”でいってみるか」

少しずつだけど、着実に前進している。すべては外へ向かう一歩を後押ししているようだ。

再びドアノブに手をかけると、さっきまでの汗は嘘のように引いていた。

ガチャリ

—いざ、自分探しへ—

第一話 2

部屋を出ると、左手に襖の部屋、向かいにもうひと部屋、右手にはトイレと下に続く階段が見えた。どうやらここは一般的な一戸建てのようだ。

できるだけ戸は開けたくないから、ここは素直に一階へ行こう。

下に降りようとする、階段の下にいた女の子と目があつた。彼女は目をまん丸に見開いている。

「お、…おはよ」

と、言つたかと思つたら、こつちが返事をする間もなくその場を去つてしまった。

一瞬の出来事でよく見えなかったが、彼女は黒髪のショートカットで、多分俺とは違う学校の制服を着ていた。見た目も俺より幼かつたような気がする。

あの反応からすると家族…だよな？ てことは、そうか、俺には妹がいたのか。

恐る恐る階段を下りると、さっきの子の声がした。声はすりガラス調のドアの向こうから聞こえてくるようだ。

「お母さん、お母さん大変！ お兄ちゃんが起きてきたよ！ しかも制服着てる！」

「まあ！」

“まあ！” ってなんだよ。

もしかして俺は引き籠りだったのか？ この頭とこのなりでオタク

だったとしたら…、ナルなキモい奴じゃないか！

や、やっぱり“僕”って言うべきか、いやいや、そもそもオタクだったら“拙者”がいいのか？

ええい普通が一番！

ドアを開けると、さっきの妹と母親らしき人が一緒に朝食をとっていた。

と、とりあえず朝の挨拶だ。

「おはよ…」

「お、おはようキリオ。あ、朝ご飯食べるわよね？」

「た、食べよっかな」

「ちょっと待ってね、すぐ用意するから」

思いのほか若い母親らしき人がとても動揺している。

まあそこはいいとして…、ついに名前ゲットだ！

俺は“キリオ”！ 名字は？ 何キリオだ？ 焦るな、それは後で表札を見ればいいじゃないか。

—名前があつた—

当たり前のことなのに、俺はちょっと感動していた。

テーブルは4人掛けで、妹と母は向い合せに座っている。えっと、俺はどの席に座ればいいんだ？ この場合、普通は妹の隣に座るよ

な。ふとその席を見ると妹と目が合った。

妹は慌てて目を逸らすと、パンをかき込み、ミルクティーで一気に流し込んだ。

「ごちそうサマ！　じゃ私いつてきます！　お母さん携帯よろしくね」

行動がすべて駆け足だ。

「ああつズルい！」

そそくさと席を立った妹に母が漏らした一言……。
なんだなんだ？　君たち……、俺と一緒に嫌なのか？

妹が出て行き、二人きりになるとリビングは静まり返った。
母はパンとサラダと紅茶を俺に差し出し「はい」と言っただけ、一言も話さず台所仕事に専念している。その鍋はさっきも洗ってなかったか？

それにしても、テレビ……大きいな。テレビ台に入っているのは最新式レコーダーだしオーディオも立派なものだ。なぜか違和感を感じるのは気のせいかな？　俺の部屋には何もなかったはずだが……、このもの凄い格差はなんだ。

もしかして俺、なんか悪いことしたのか？　まさか、“おいた”すると部屋にある物を捨てられてしまうとか？　そんなの聞いたことねえよ！

やめやめ、どうせ考えても答えなんか出ない。

とりあえず飯を食っちゃおう。

朝食を全部たいらげ、席を立ったその時

「キリオ、その携帯…アナタのよね？」

母がやっと口を開いた。

ずっとテーブルの上に不自然に置かれていた紺色の携帯、この母の携帯にしては少し色気がないと思ってたけど、やっぱり俺のだったか。

「ああ、本当だ。俺のだ」

まるで三文芝居のような台詞を吐く。

妹の去り際の言葉からも、俺の携帯じゃないかと思当をつけていたが、母から切り出すのを待っていた。しかし、半ば諦めかけて席を立ったこのタイミング…、最後の最後に迫られてやっと言いました的な感じ…。

どうやら家族と俺のコミュニケーションは上手くいっていないようだ。

「いつてきます…」

「い、いつてらっしゃい」

すっげー神経使うな。いったいどんな奴だったんだ俺って？ この調子じゃ他のことなんか全然聞き出せない。

家の外に出て後ろを振り返る。

「良かった。うちの屋根だけ色が青い」

バカけているが、こうした目印でもないと家に帰れないって事態が

起こりかねない。今の俺にとってはちょっとしたことが致命的なんだ。

「そうだ、表札も」

門の石造りに木彫りの表札がはめ込まれてある。そこには一文字“柳”とあった。

―俺の名前は“柳キリオ”―

「まあ悪くない響きだ」

名前が判ったところで何も思い出さなかったか…。でも、失ったものを少しづつ取り戻していけば、いつかは…。

そのまま空を仰ぐと、地球をぐるっと一周しているといわれている隕石群のリング“シフォンの帯”がハッキリと見えた。本日は快晴なり…。

そういえば、昔見た映画だったり、最新式レコーダーのことだったり、このシフォンの帯も…、自分を取り巻く環境以外の一般常識や無駄知識は覚えてるみたいだな。

つまり想い出と単なる情報とでは、脳が司る記憶の質や保管場所が違っていることか。

こうやって自分が措かれた今の境遇を客観的に見直すと、新手の脱出ゲームみたいで滑稽だな。

「あ…、滑稽なのは自分自身が、リアル過ぎて笑えねえ…」

これがゲームだったらどれだけ良かったか…。そうだ、さっき手に入れた携帯！

学校に着くまでに自分の交友関係くらいは把握しておかないと。

電源ボタンに手をかける。

ロックはかかっていない。なんて無用心な…。って、そのお陰で見れるワケだけど、なんか複雑だな。

「うわー、なんか人の携帯見るみたいで気が引ける」

まずは履歴確認と、発信は少ないな、逆に着信は結構あるぞ。

「タケル」に“ユウ”、“カオル”に“シン”に“ヒロ”、と」

この5人がほとんどだ。主だった友達ってことか。

しかし…男か女か判んねー名前ばっかだな。それに非通知がたまにあるのも気になる。昨日の最後の着信も非通知だ。

とにかく、まずはこの5人を探さないとな。全てはそこからだ。

第一話 3

俺が記憶喪失のことを誰にも打ち明けず、慎重になっているのには理由がある。

てか、何事もなきやとつくに家族に打ち明けてるっての！ だけど唯一覚えていたことが邪魔をしていた。

―よくわからない“秘密”だ―

なぜか俺は、そのことを言わない約束をしまっている。もしかするとそれは夢の中の約束かもしれないけれど。

だけど、もし現実だったとしたら…、昨日までの俺にとっては最後の記憶で、今の俺にとっては一番新しい記憶ってことになる。過去の俺と今の俺を繋ぐ唯一の鍵…、きっと記憶を取り戻す重要な手掛かりなんだと思う。

そのせいもあって、安易に誰かに知られてはいけない気がした。だから、今俺がすべきことは気の許せる相手を探し出し、全ての事情を打ち明け、記憶を取り戻すための協力を得ることなんだ！

とは言ったものの、たった今直面している問題をどうにかしないと…。

学校って…どこだ？

「おっす！ キリオ！」

少し間が空いた。

ああ、“キリオ”って俺のことか。

うわっ、男でロング！ しかも、俺と同じ制服、コイツは誰だ？
例の5人のうちの一人か？

なんか見た目もチャラいし、“おっす”って挨拶の返しだったら……
こうか？

「お、おう」

う…、じっとこっちを見てる。何か返事を変だったか？ こいつ体格ガッチリしてるし、ハイタッチとかした方が良かったのか？ それともやっぱり俺はオタクキャラなのか？

「どこ行くんだよ？ 学校と逆方向に歩いて」

「へっ？」

「しかもお前が朝から学校なんて、今日って何かあんのか？」

「ちょ、ちよつとな」

「ふーん」

見知らぬ相手とゼロ状態から会話して、意味不明な質問さえもかわした！ 何気に凄くないか俺！？

少し肩が震えてる。ピンチを切り抜けた後にくる快感にも似た感覚…、これが武者震いってやつか！

実際、ツツコミが入ったのは“学校と逆方向に向かっていた”という行動だけ、キャラ自体はスルーだったんじゃないか？ この調子ならいける！

今日は“おう”と“ちよつとな”で乗り切ってやるぜ！

「そついえばキリオ、昨日の夜電話したのに出なかったな」

「…！ 悪い、ちよつとな」

昨日の夜、俺に電話した奴は二人。タケルと非通知の奴だ。

少し話したただが、この距離感の間柄で非通知ってことはないだろう。ってことは…、コイツはまずタケルに間違いない！

携帯の着信が一番多いのがタケルだから…、予想される俺との関係は…親友！！

待てよ？ 親友がこのチャラ男ってことは、俺がオタクって説はなくなっただんじゃないか？ 益々いいぞ！

「何ガッツポーズしてんだ？」

「なんでもねーよ…タケル」

俺はさりげなくタケルの名前を口にし、恐る恐る横目で表情を窺った。最終確認だ。コイツの表情に疑問の色は見えない。

通った！ コイツはタケル確定だ！ いいぞ、親友ゲットだぜ！ さらにコイツと一緒になら学校にも行ける。学校までの地図もゲットだぜ！

「キリオ、今日はやけに機嫌いいな」

「ちよつとな」

「はーん、判ったぞ、お前らやっぱり付き合うことになったんだろ？ だから俺の電話無視したり、朝ちゃんと起きてんじゃないか？」

「なっ！？」

待てっ！　なんだこの流れ？　今の俺じゃどう転んだって対応できない会話だろ？　付き合う云々って、交友関係もままならないうちに恋愛話って…、そもそも相手誰だよ！　相手…って？　ちよつとだけ気になるな…。

いや、おかしくないか！？

こっちが情報を引き出そうとしてたのに、逆に質問されちまってる…。しかも、俺の行動がおかしいことと巧く繋げてきやがった。タケルの奴…、さすがに俺の親友だけのことはある。

はっ！　待てよ。そもそもこれが俺の秘密なんじゃないか？　判んねーけど、ここは迂闊に答えちゃダメだ。

「…なあ、付き合ってるかどうかは別として、何で朝起きたくらいでその話になるんだ？」

「お、なーんかうまくごまかそうとしてんだろ？　まあいつか、その口ぶりじゃ付き合っていないみたいだしな。ほら、ユウって見た目はアレで真面目だろ。だから『朝はちゃんと来なさいよ』とか『一緒に学校行こう』とか言われたんかなって。お前、さっきユウんちの方に歩いてただろ？」

なるほど、そういうことか。慎重になって正確だった。

“ユウ”といえば、あの5人の中の一人に間違いない。

整理すると、ユウは女で、見た目は今風のギャルなんだけど真面目っていうギャップがある。（多分）

さらに俺とは友達以上恋人未満の微妙な関係だ。（多分）

これで友人と恋人未満を把握したことになるな。よしよし、幸先いいぞ。

「おっはよっ！ 二人とも」

また一人、今度は明るめの女子が現れた。

「おっす！」

タケルが挨拶を返す。

この子も5人の中の一人？　もしかしてこの子がユウ…？　いかに意識するな。とにかく返事をしておかないと。

「お、おう」

「な、に、キリオ何か変だぞー？」

「だろー」

当たり前だ！　お前は誰なんだ？　ユウなのか、違うのか？

そうだ！　ユウなら見た感じはギャル…ん、んん？　黒髪のショートでもロングでもない、これはセミロングになるのか？　化粧つ気もないし、ギャルと言われれば見えなくもないが…。

「キリオとヒロはいつも遅刻組なのに、今朝はどうしちゃったの？」

ヒロ？

「だろ、コイツ言わねーんだよ。俺はてっきりユウと付き合い出したのかと思ってよ」

「ああ、ユウ真面目だもんね。でもないない、キリオって相手に染まるタイプじゃないじゃん」

「そっぴやそっぴだな。カオルお前頭いいな」

カオル！？

「まーねー」

いかんいかん、聞き役に徹しちゃ駄目だ。

「勝手に言ってる」

と、口では平静を装っていたが、心の中は穏やかではない。『ナイスだタケル！』と思わず叫んでいた。

この得意気にしてる女が“カオル”か。なんかタケルといいコンビだな。

「じゃあ勝手に言っけどさー、二人ともお互いのことどう思ってるね？」

「カオル…それってフツー、本人がいなくて話さねえか？」

まったくだ。

「あそつか、今朝は珍しくキリオがいるんだった。じゃあユウの方はどうだろ？」

こいつ…わざとだろ。

「あー、俺はいい線いってると思うぜ。ユウって素直だから感情とか隠しきれないっていうか、やっぱりキリオがいると違う気がするもんな」

「お、タケルもなかなかするどいね。つーか、アンタ意外にユウのことよく見てるのね」

「バツカ、誤解を招くような言い方すんなよ！ キリオ、違えーかな」

「何言い訳してんのよ」

なんというか、この二人…、息が合ってるっていうか、全然会話に割り込めねえ。さっきから人の恋路を好き勝手言いやがって。お前からこそどーなんだっての。

でも、いい感じだ、情報は揃ってきてる。

“ヒロ”も出てきた。俺と同じ遅刻常習犯って言うてたな。あれ？俺って遅刻ばっかしてんのか？ ま、まあいい、もう過ぎたことだ、今日からは違う。

これで例の5人のうち残るはまだ名前すら出ていない“シン”だけか。

まあ、ユウもヒロも名前だけで、まだ会ってはないけど、少しずつ交友関係が見えてきたぞ。

タケルとカオルはあの調子でずっとしゃべり続けている。

俺は記憶喪失を悟られまいと発言をセーブしていたが、そんなこと差し引いてもこの二人の会話は圧倒的だった。いかんせん口数が少

なかったか…？ まあいい、内容は他愛もない話ばかりだ。

それからもう一つ判ったことは、俺は気難しくマイペースだってこと。登校中に会った他の奴らの反応がそういつていた。

朝から俺がいることにビックリして、でも次の瞬間には『まあキリオだからな』って、みんな同じ反応しやがった。なんか、遠目には変な奴くらいで、距離感が近いのは御免って感じた。

なるほど、今なら母と妹の態度も理解できる。家族からみても俺は絡みずらい奴だってことか。

第一話 4

生徒の数が増えてきた。ってことは、あの辺りに見えてるあれが学校か。

こっからはどこで誰に会うか判んねーからな、名前が出た奴のことはおさらいしておかないと。

“タケル”は、黒のロングでガツチリ系と一見いかにもチャラ男だけど、意外に社交的だ。登校中に会った他の奴等との絡みからも交友関係が広いのが判った。俺とは親友のようだが、少しミスマッチな気がする。まあ、とにかく話し易いし気のいい奴だから、誰とでも合うんだろうな。

“カオル”は、黒のセミロング以外これといった特徴がない。顔立ちにはまあ普通って感じだ。タケルと同様に交友関係は広そうで、しかも男女分け隔てない。ユウとは親友らしいから、俺とタケルの関係もこの二人に絡んだものかもしれない。

“ヒロ”は、まだ会ってないけど、話を聞いた感じだとタイプの俺に近いみたいだ。ちょっと前まではタケルよりもヒロとつるんでいることが多かったらしい…。まあ、いつも昼過ぎに学校に来るらしいから、詳しいことは本人と会ってから話そう。

“ユウ”は、一見ギャル風だけど真面目らしい。俺と一緒に登校しているせいもあって、タケルとカオルの話はユウに絡んだものが多かった。何をもって真面目というかは人それぞれだけど、陸上部に所属していて朝から練習に出てるってだけで十分真面目だと思う。

正門を抜けると、カオルが突然グラウンドの端に向かって叫んだ。

「ユウー！ おっはよー！」

え！ ユウ！？

自然と目が追いかける。

じゃあ、あこで走り幅飛びしてる…茶髪のショートの子が“ユウ”？

彼女は着地と同時に手を振り返してきた。間違いない、あの子が“ユウ”だ。

しかも、何かに気付いたのか、すぐに手が止まった。タケルもカオルも俺を見て笑っている。

ああ、その何かってのは俺のことか。

ユウがこっちに向かって走ってくる。

それにしても…顔ちーせ…！ いや陸上部だけあって、体が細くて手足が長く見えるせいかな。

徐々に近付いて顔が認識できる…って、おいおい、すげー可愛いじゃないか。

恋人未満…！？ いかん意識しちゃう。

ユウはグラウンドのネットを隔てた俺の目の前までやって来た。

おわ、目エでつか。

「キリオ！？ おはよ。どうしちゃったの？」

「お、おう。ちょっとな」

どうしたもこうしたも記憶もない。

とにかくやばいくらいに可愛い。っーか意識し過ぎだろ俺！

「ふうん…。ねえ、昨日って何の用だったの？」

「え、昨日？ ああ、ちょっとな」

「…」

アレ、何かあからさまに機嫌が悪くなったぞ…？

「そうね、どーせ私には関係ないもんね！」

怒った顔も可愛いな、とか思ってる場合じゃない。

ユウはそう言って練習に戻ってしまった。

やっちまった…。

「バーカ」

タケルが一括。

「キリオ！ アンタ、ユウに何かしたんじゃないでしょうね！？」

カオルも俺を責め立てる。

「何もしてねえよ。多分…」

「多分って何よ！」

「だからキリオ、昨日は何してたんだよ？」

よくしゃべるこの二人に追及されるとたまらない。

「うっせー、知るか！」

こっちは記憶喪失だったの！　ここまで普通に会話できてたのが奇跡だったんだ。ほんのついさっきまで上手くいったのに、昨日のことなんて知るかよ。

…昨日！？　記憶が消えた日だ。

俺は何をしてた？　誰かと秘密を交わしてた。

待てよ…、今のところ俺の昨日の行動を知ってる奴はいない…。つてことは、その誰かは今日俺が話したメンバー以外になる。だとすると“ヒロ”か“シン”、もしくは“非通知の奴”…、この三人に絞られるんじゃないか？

ヒロは昼にならないと学校に来ない。となると、今はシンを探すべきか。

あながち失敗ばかりじゃない。

「なあ、シンってもう学校に来てるかな？」

タケルはカオルと顔を見合わせ、さあといった表情を返した。カオルはさっきのユウとの件が尾を引いてるせいかな、素っ気なく「知らない」と突っぱねてきた。

「な、何か怒ってないか？」

「…」

「じゃなくって、俺達二人ともシンって奴は本当に知らないぜ。誰だそいつ？」

タケルは気まづくなりかけた雰囲気をやんわり収めてくれた。ちょっと助かる。

だけど、せっかく見つけた糸口は、すぐに霞がかってしまった。

“シン”を知ってる奴がいない。

ということとは、“シン”とは俺だけが知り合いつてことになるよな。それを探すのって難易度高くないか？ いや、でも、電話はそれなりにあるし、名前も愛称で登録してるんだから気の知れた間柄のハズだ。もう少し様子をみれば、向こうから現れるかもしれない。電話がかかってくる可能性だってある。

そうだ焦ることはない。今日一日でなんでもかんでも判るわけじゃないしな。

だけど、一度気になるとなかなか頭は切り替わらない。

もしかすると“シン”はクラスメートの誰か、とも思ったが、どうやらタケルと俺は同じCクラスみたいなのでそれもない。

「なんだよ、俺の顔に何かついてるか？」

「いや、面白れえ顔だなあとと思って」

「んだと！」

「はは、『冗談』冗談」

ちなみにカオルとユウはDクラスのようにだ。

ヒロはAクラスらしい。

スツキリしない…、後一人だつてのに。

俺は部活もやってないし、委員会にも入ってない。クラスが違うと
なると、それ以外にシンとの接点が見当たらない。

はっ！ もしや、妹か？

“シン子！”

いや、ないない。アホか俺は。おしんこちゃんって言われてイジメ
られちまう。

じゃあ、母さん？ いやいや親父？

… 違えな。そもそも家族を“シン”とは登録しないだろう。。。

「ううー判らん」

行き詰って机に突っ伏していると、見覚えのないオッサンが教室に
入ってきた。スーツ姿で歳は30代後半って感じ、オデコがきてる
若ハゲ気味のこいつは、おそらく担任だ。

その推定担任は特に前ふりもなく「出席を取るぞ」と言った。

「相田シヨウ」

「はい」

「石川セリカ」

「はい」

・
・
・

「堀田トモヤス」

「はい」

「柳キリオ」

「はい」

「…は欠席と。お！」

ここで流れが止まった。

「おお、すまん、柳。今日は出席か」

教室内がザワついた。

「マジ、キリオ来てんぞ」

「朝キリオだ」

さつきから席にいただろ！

今更気付く奴がいるとは。登校ん時もそうだったけど、朝から来たくらいでツチノコ発見みたいに騒ぐな。

「大和タケル」

「ぼはぁーい」

タケル…、お前なんて言ってるかよく判んねえよ。

「和田ツトム」

「へーい」

それにしても、注意して出席を聞いてみたが、やはり“シン”にあたりそうな人物はいなかった。こりゃあ俺から電話しちゃった方が早いかな。

「なあタケル、俺が朝から来たのっていつぶり？」

「朝？ ああ、遅刻じゃない日か」

「うわ、皮肉かよ」

「ちょうど二ヶ月ぶりだな。そんな時も確か俺、キリオと登校したから間違いないぜ」

その時も？　なんだ、ただの偶然か？

キンコンカンコン

おっと予鈴だ。とりあえず授業は静かに受けるとするか。ここまでは順調だしな。この調子で情報を集めていれば、途中で記憶が戻るかもしれない。

一限目は数学だった。

机の中にあつた教科書を開き、教壇に立つ教師の説明をしばらく聞いてすぐ異変に気付いた。おかしい…、とてもじゃないが理解できない。

そうか！　失われてしまった記憶の中に、きっと勉強の知識も全て

含まれてたんだ。昨日までの俺は天才だったに違いない。

黒板には意味不明な暗号が連なり続けている。それをノートに複写するはずのペンは、既に俺の手元にはなく、鼻と口の間に挟まっていた。

それにしても辛い…興味のない話ほど長く感じる時間はない。

そうだ、この長い時間を無駄にしないよう、やるべきことを整理しておこう。再びペンを持ち、ノートの上を走らせる。

—次に何をすべきか—

第一話 5

休み時間に入るとすぐに屋上に向かった。

授業中ずつと考えていたこと…、漠然とした勘だけど、今の自分のキャラを分析すると、“屋上”と“保健室”は外せない気がしていた。おそらく普段から俺はそこによく行き、残りの一人“シン”とは、そこで交流があったんじゃないかと思ったワケだ。

学園ドラマやアニメでいえば屋上は定番のシーンだからな。だけど、今時はどこの学校も閉鎖しているだろう。

過度な期待はしてないが学校散策だと思って階段を上る。

『開放中』

予想に反して、屋上に出る扉には文字通り来る者を歓迎するプレートが掛けられていた。

なんて危機管理の薄い学校だ。

ギギイ…

重苦しい鉄の扉を開けると、そこには校舎の敷地分のスペースがそのまま広がって開放感に溢れていた。

“開放中”とは…、上手いこと言ったもんだ。

入り口から少し歩いて辺りを見回すと、男子生徒が一人、金網に寄り掛かっていた。

彼もこちらに気付き手を挙げている。

「よう、珍しいじゃん」

「おう。ちょっとな」

もう相手が誰であろうと、とりあえず自然と返事をしてしまう。既に条件反射だ。

さーて、コイツは誰だ？

俺はこの謎の男子生徒に歩み寄った。おそらくこいつが“シン”だろうと思いつながら。

「何見てるんだ？」

「べつつに…、お、今日はサッカーやるらしいな」

グラウンドに集合した生徒達がサッカーボールの入ったキャリーを運んでいる。

整列し、教師が何か言ったかと思うと、整列の間隔が広がった。

ああ、準備体操か。

「お、あのガタイがいい奴はタケルか」

待て、なんでタケルがあそこに…って！

「俺も体育じゃなかよ！？」

「あ？　なんだよ今頃、どーせサボんだろ？」

くっそ、せっかく真面目に授業に出たのに…、一限目だけだけど。仕方ねー、今は授業よりこっちが優先だ。

ピー！

「お、始まるぜ」

始まるとすぐにボールがタケルに渡った。すぐさま相手チームの一人がタケルに近付いてきたが、すかさずパスを出して凌いだ。

「へえ、様になってるじゃん」

うちのクラス結構うめえな。ほんの数分だけどすぐに判った。タケルだ、あいつ超うめえ。

「やるじゃんキリオのクラス。特にあの司令塔の大和、アイツは別格だな」

「大和？」

「あ？ お前、いつも一緒だろ？」

おおおう？ “大和”ってタケルのことか？ そっぴや出席順、俺の次だったな。

「そこ、セنتリング！」

「いけ、セントリング！」

今の俺の声か？

「ばか、ハモンじゃねえよ」

ああ、こいつか。

タケルからセンタリングが上がる。
オフサイドにはなっていない、うまい！

「走れ、合わせろ！」

「いけるぞ！」

クラスの名前わかんねー奴、頑張れ！
足が届いた！ キーパー抜けた！！
いける！

ピピーーッ！

「うおっっしゃあ！」

「まずは1点！」

思わずハイタッチする。

「タケルのやるー、こんな特技があつたとは」

「なんだよ、知らなかったのかよ。でもいいのか？
相手はDクラ
スだろ。カオルもユウも相手チームの応援だぜ」

「げ、本当だ」

女子は両サイドから応援している。その中には確かにユウとカオル

の姿が。しかもゴールを決めたうちのクラスにブーイングしてる。うああ、タケルつれえな。

って、コイツさっき“カオルもユウも”って言ったか？

タケルとカオルはシンを知らない…、だとするとこいつは“シン”じゃない？

おっと、またタケルにボールが、左サイドがフリーだ。

「うつしや、左がガラ空きだぜ！」

「おらー、左サイドあがれー！」

また、コイツ、同じようなこと…。

あれ、なんかグラウンドの連中がこっち見てるぞ？

「はは、熱くなり過ぎたな」

「あー、そゆこと」

体育教師らしき先生がこっちを見ている。

「コラ貴様等！ とっくに授業始まつとるぞ！！」

「はは、やべーやべー」

二人ともすぐに屋上の入り口に向かった。

あれ？ そういえば、こいつもサボリだよな？ それになんか気が合うっつーか…。

確かタケルとカオルの話の中でそんな奴がいた気がするな。俺と付き合いがあって、似た感じ…。

そつだ思い出した！ “ヒロ”だ！

今更ながらまじまじと見ると、髪は金髪、目は釣り目、細見でシャツはだらしない。

間違いねーだろ！

「つたく、お前昼から来るんじゃないのかよ！ ヒロ！」

「あ？ お前こそ朝から来てんじゃないよ！ キリオ！」

お互い顔を見合わせ笑ってしまった。

「ぷっはは、何の偶然だ。いつも遅刻する二人が揃って朝から来てるなんてな」

「ああ。だけど、授業サボってる時点で朝来た意味ねーけどな」

「違えーねー」

なんだ、この心地良さは。タケルとは違う話しさ？ いや、もつと感覚的なもの…。

とにかく、こいつはヒロで確定だ。これで四人目！

となると、残るはまだ会えてもない、情報もないシンだけだ。

そして俺の交友関係上、ピースにはまっっていないのもシンだけ、しかも手掛かりすらない。

裏を返せばつまり…、ここをクリアすれば大きく道が開けるってことじゃないか？

あくまでこれは俺の勘だが。

「じゃな、俺、教室戻るわ」

「ああ、じゃあなヒロ」

なぜか今の俺はとても心地いい。気運でいうんだっけ？ この流れのまま一気に5人目だ。

よし！ シンに電話をかけよう。

携帯の履歴を開きコールに手をかける。一瞬だけ指が止まった。

「全く面識のない奴に電話するのって緊張するな」

はは、何を今更。今日一日ずっと似たようなことの繰り返しだったじゃないか。基本的に受け身でいればいいんだ。あれ？ 俺から電話するのに受け身でいいのか？ まあこの際もうどうでもいいや。

ブルル…ブルル…ガチャ

出た！

『はい』

男の声だ。

「あー…オレオレ」

しまった、これじゃあ何かの詐欺みたいだ。

『おう、キリオか。どした？』

お、この感じ、結構仲が良さそうだな。

「ああ、ちよつとな。それよりシンは今どこにいるんだ？」

『どこって？ 普通に学校だけど』

あれ、シンも学校の生徒じゃないか、なのになんで誰も知らないんだ？

「なんだ、学校来てたのか。なら昼飯一緒しねえ？」

『あ、ああ！？ えーつと、いいケド。お前んとこのガツコ、河川敷のさらに向こうだよな。もしかして近くに来てんのか？ ああそっか、サボリかー？』

おおっと、違う学校かよ…。どうりで誰も知らないワケだ。

「いや、悪い。やっぱまた今度な」

『あ、おいキリオ！ 何だよ変な奴だな』

「ホント悪い。じゃあな」

話半分になってしまったが、電話を切った。これ以上話し続けたら不審がられるのがオチだ。

それにしてもシンは俺とどういう関係なんだ？ 同中か？

いや、それがわかったところで何かが大きく進展すると思えない。他の誰とも絡みがないんだからな。

たーく、なにが“大きく道が開ける”だ…、たいした勘だぜ。

でもこれで俺の周りの主要な人物は把握できたことになる。今日はこれで充分だ。後は家に帰ってキチンと復習しとけばバッチリだろう。

…って、俺、ちゃんと家に帰れるかな…。

#つづく

第二話 恋がしたいっ！

記憶をなくしたあの日から数日経った。

今日も一日なんとか乗り切った。タケルは珍しく用があるとかで、久しぶりに一人で帰っている。

ユウとは…あれ以来、あまり話していない。言い訳するのも変だと思っただし、ユウはいつも部活ってこともあって、キツカケが作れないままだった。

相変わらず綱渡りみたいな毎日を送ってるけど、変わったこともある。

日を重ねることに余裕が出てきた。記憶は戻ってないが、つまりは新しい俺が、新しい“自分”を築き直しているってことだ。

それに思いの外、今の俺はうまくやっている。

例の5人を中心に、家族とも、他の奴らとも積極的に会話するようになった。単純なことだけど、話をすれば少なからず得るものがあった、何もしなければ進展はない。それが判ったんだ。

まあ、シンだけは別の学校ってこともあって、未だに会ってないけど。

こうして一人でいる時は、自然と自分の行動や周りの反応を整理する時間になっていた。だけど…、何か引っかかる。何か忘れてないか？

河原沿いの道を歩いていたら、高架下にふと目が向いた。視線の先には猫とじゃれている少女が見えた。

長い黒髪と整った容姿、ちょっと目を向けただけなのに、俺はその場に立ち尽くし、その少女を見つめていた。なぜか目が離せなかった。

彼女から伝わってくる感じ…、清楚とか？ いや、もっとほかの何か…。河原を背にした彼女からは哀愁のようなものが窺える…。なぜだろう…、猫とじゃれているだけの他愛もない光景なのに…、この切ない気持ち…、憂い…、彼女が気になってしょうがない…。

「あの子はいつたい…」

ついさつき見かけた名前すら知らない子だぞ？

以前の俺はユウが好きだったハズだ…、それなのに、ユウ以外の子が気になるなんて…。

新しい自分…、ってことは、これまでの人間関係を変えてしまう可能性もあるってことなのか。

「どうすりゃいいんだ…」

立ち尽くす俺を我に返したのは、携帯のバイブだった。ディスプレイを見ると“非通知”の文字。

さっき思い出せなかったのは、これだ！！

未だ一切の関係が判っていない“非通知の人物”、この電話はそいつからだろうか？ だとすると記憶をなくした時の自分と最後に話をしたかもしれない相手…。

どうする？ 出るべきか？ 早く決断しないと切れてしまう。

俺の信条は…、何もしなければ何も進展しない！
通話ボタンを押した。

「もしもし…」

『…』

返事がない。

「もしもし？」

『ねえ、アナタどこにいるの？』

女の声？ 違う…？ いや、何か変声機を使ってる？

音声変えて電話って、どう考えても怪しいだろ。どうする？ 正直に答える必要はない。

「ああ、今学校だけど…」

『何嘘ついてんの？』

「えっ？」

なんだ？ まさか、俺をどこから見てるのか？ 辺りに身を隠せ
そうなところは…、たくさんあるな。

『探せっこないって』

…！ やっぱり！ 確実に見られてる。いったい誰が？ そもそも
何が目的なんだ？

「俺に何の用だ？」

『用も何も、アタシが誰だか判ってないでしょー？』

やっぱり女？ 女の声はどこかふざけた感じた。俺のことからかってやがるのか。

こいつが、あの日の非通知の相手…。

「えっと、どちらさまでしたっけ？」

『ひどーい、本当に忘れちゃったの？』

“本物に”だと！？

こいつは…、俺の記憶がないことを知っているのか！？

「待つ…」

ガチャ

『プープープー…』

ちよっと待て！ ここで電話を切るか？ おいおい、話も途中だったじゃないか。なんだこの尻切れトンボは。

どこの誰だか判らないけど、俺の記憶喪失に気付いている奴がいた…。

俺は、今のところ誰にも気付かれずに上手くやっていた…ハズだ。どこかで不自然な行動をとって見抜かれていたとか？ いや、あの

口ぶりは明らかに始めから知ってる感じだった。

まさか…、“秘密”を交わした相手は奴か？

俺がそれを覚えているかの確認？

覚えていないと判断して電話を切られた？

くそ、駄目だ！ 何を考えても“？”がついちまう。

家に着くまで、非通知の女（だと思う）のことが頭から離れなかった。

ここしばらく、日常に溶け込み出したこともあり、そっちに気を取られ過ぎていた。しばらく忘れていた“秘密”のこと。

そうなんだ、その手掛かりをつかむ為に、自分と交流のある人物をあたっていたんだ。それがあの5人。そして5人とは別に存在する最後の一人、“非通知の人物”がついに現れた。

だけど、どこの誰かも判らないんじゃないか、俺からは動きようがないか…。

「いや…、あるぞ！」

唯一の手掛かりは、奴が俺を見張ってるってことだ。それを逆に利用すれば…！

次こそは必ず“非通知の女”の尻尾を掴んでやるぜ。

第二話 2

翌朝、家を出るとユウが待っていた。

「おはよ、キリオ」

「お、おう、どした？」

「今日朝練ないの。だから一緒に学校行かない？」

「ああ、行こーぜ」

ん？ 朝練がないと一緒に学校に行くものなのか？

それにしても、横を歩くユウを改めて見ると…やっぱり可愛い。茶色がかったサラサラのショートが歩く度に小刻みに揺れる。ついか本当に目エでつけ。特に化粧つ気がないのにこれだ。

だけど、ドキドキ感はない。

やっぱりそれは、河原にいたあの子が気に掛かっているせいかな。そういえば今の俺はユウとちゃんと話したことがなかったな。趣味とか好きな食べ物とか、何も知らない…。

「この間はゴメンね」

「え、何が？」

「なんか私、態度悪かったから…」

ああ、あの始めて会った時か。ずっと気にしてたんだ。別にユウが気にすることないのに。

「ああ、気にしてないよ」

「そっか…」

待てよ。この間もそうだったけど、素っ気ないのは駄目だ。ユウは見た目は垢抜けてるけど、中身は相当真面目だ。逆に気にかけて過ぎなぐらいじゃないと駄目なんだ。

「ウソ…、けっこーきた。俺って打たれ弱かったのな」

「そっか。あはは、ゴメーンね」

あどけない笑顔が返ってきた。やっぱり、この子は笑ってる方が似合ってる。

「ユウが陸上やってるのって、やっぱり走るのが好きだから？」

「え？ まあ、それもあるけど、自分と向き合えるからかな」

「自分と？」

「そ。悩んだりした時なんかは、ひたすら走ったりする」

「うわっ、ソレ、どMじゃん」

「ち、違つわよ！　なんていうか、自分の中で答えを出すっていうか…」

「ふーん、そういうもんなんだ？」

「そういうもののっ！」

「は、けっこう頑固だ。」

「昨日は…、ちょっとと思うところがあつて、ずっと走ってたんだ」

「悩みてやつ…？　それで、答えは出たの？」

ユウの足が止まった。

「内緒」

「なんのフリだよっ」

「いーの。あ、こっちから行かない？」

ユウが立ち止まって指差したのは学校の裏門の方だ。

「いいけど、遠回りだぜ」

「いーのいーの、せっかく一緒なんだから、もう少し話したいなって」

くあーっ、こいつ可愛いなあチクショー。

この道も一応通学路だ。少ないとはいえ生徒が歩いている。

「おっすキリオ」

「ユウおはよー」

ちらほらだが見慣れた顔もいた。誰も俺達と一緒に登校していることに驚いた様子はない。公認の仲良しグループ扱いつてことなのか？学校の裏門に着いた。

へえ、ここに繋がるのか。まあ遠回りだし、まず使うことはないな。ユウとはクラスが別なので、正面玄関前で立ち止まる。

「じゃ…」

「おっはよー！」

勢いよくカオルが現れた。

「あ、カオル、お、おはよ」

「よっ」

「あれ、キリオとユウが一緒？ 今日の朝練は…もっつ」

「わっ、じゃ、じゃあねキリオ。今日はありがと」

ユウはカオルの口を押さえ付けながら校舎に入っていった。

「なんだありゃ？ それに、ありがとって？」

後ろを振り返ると、グラウンドでは陸上部が朝練をしていた。

ああ…、ユウは朝練がないって言ってたけど、あれは嘘か。

今日に限って裏門から…、なるほど、こっちのルートからだとグラウンドは見えない。

俺だって少し考えれば判る。理由は明白だ。

ユウは俺と仲直りしたかったんだ。

ユウは真面目だから自分から誘うとか苦手なんだな。それで精一杯の口実が朝練がないってか。

あはは、そんなのすぐにバレるだろ。まったく、嘘までカワイイのな。

ユウは多分、俺に好意を持ってくれている。

まだ彼女の中ではボンヤリした感じなのかもしれないけど、それは俺の態度がハッキリしてないせいもあるんだろう。

ユウのことは気になってる…、だけど、付き合いたいってワケじゃない。記憶を失っていないければ…、俺がもっとユウのことを見ていれば、二人は付き合ってたんだろうか？

そういえばおかしなもんだ。ユウのことといい、河原の子といい、俺、記憶喪失だぜ？　なのに“好き”とか言って、なんか笑えるよな。

「！？　あ…」

ウワサをすれば、例の河原にいた子じゃないか！

彼女、同じ学校だったのか！？

彼女のいる下駄箱の場所は三年生の…、年上だったのか。どうりで大人っぽいと思ったんだ。

すぐに名前も判った。

“アイ”。

彼女の友達が彼女をそう呼んでいた。ピッタリのいい名前だ。

彼女が同じ学校だと判ったものの、俺との接点がないことには変わらない。

でも何か話したい…、落ち着かず、休み時間の度に校内をうろろろしていた。

キツカケがほしい…。

そう思った矢先…、前からアイが歩いてきていた。

「…！」

咄嗟とつとに体が隠れようとする。

何やってんだ俺！ 今“キツカケがほしい”って思ったばかりだろ！ 逃げるな！

それに…、一度記憶をなくしてるんだ、これ以上失うものなんてないだろ！

俺は近付いてくるアイに勇気を出して声をかけた。

「あの…、すいません」

「はい？」

「よ、よく河原の高架下にいますよね？ 俺もあそこよく通るんで…」

何言っただ俺は！？ よく通ってたらか話しかけるのか？ これじ

や不審者っぽくねえか？

アイは驚いた顔で俺を見ている。信じられない、といった表情だ。やべ、なんかまずいこと言ったかな？

「まさか君の方から声をかけてくるなんてね」

「えっ？」

アイは俺を知っている？

いやでも、それを聞くワケにもいかない、なんて切り返す？

「えっとそれは、どういう意味ですか？」

濁してしまった。

「ふーん…。ねえ、それじゃ明後日のお昼に改めてあそこの高架下で話さない？」

「はい？」

「決まり。じゃあ日曜の2時に高架下に来てね」

「は、はいっ！」

アイは足早に行ってしまったが、ひいき目にみても嬉しそうに見えた。

第二話 3

日曜にアイと会う約束…、それもアイの方から誘ってくれた。

少しだけ浮かれていた俺の元に、また非通知の電話がかかってきた。なんて間が悪いんだ。奴がどこからか俺を見ているとしたら…、まさか、非通知の女は同じ学校の奴だったりしないよな？

「…もしもし」

『ハロー久しぶり。なかなか出ないから着拒されてるのかと思うちやっただー』

「何の用だ！」

『やだ怒らないでよ。この間の続きよう』

相変わらず人をバカにしたような口調だ。声も変声機を通した例の高いトーンだから、尚更イラっとくる。

「お前…、何を知ってる？」

『何って…、もしかして秘密のことかなー？』

「！」

こいつは…！

やっぱりあれは夢じゃなかったのか？ じゃあ俺が秘密を交わしたのも…！

いやまで、まだ確証があるわけじゃない。

「何のことだ？ 秘密って？」

『あはははー、無理すんなって。アンタの記憶のことだよ』

「な！ お前は…、いったい何者だ！？」

こいつは！ 秘密だけじゃなく俺の記憶のことまで知ってるのか！？

『日曜2時に駅前のパン屋“サンライズ”で待ってて、アンタの秘密を教えてあげる。あと、メロンパン10個よろしくね』

「えっ、日曜は…」

プツッ

『ツーツーツー…』

「くそう、切りやがった」

日曜の2時って…、アイとの約束があるってのに。

どうする？ あの感じ…、非通知の女は俺の秘密を確実に知っていると考えるべきだよな。

俺の目的はなんだった？

秘密を調べること…、だったら迷うことはないはずだ。

だけどそれは、信用できる相手を見つけて、一緒に協力しながら調

べるつもりだった。

あの非通知の女は少しも信用できない。当日だって正直に姿を現す保証はない。

いつも陰から人を監視して、あの人をからかうような口調…、もしかすると俺を見て遊んでいるだけかもしれない。

だけど、遊んでいるにせよ、俺に秘密を教えるにしろ、奴に何の得があるんだ？

そういや“メロンパン10個”って言ったな、それが奴の目的か？

いや、そんな訳ないだろ。

「判んねえ…」

ブブブブ…

また着信がきた。

「やろつ、懲りずにまた！」

ディスプレイの文字は“ユウ”と表示されていた。

ユウから！？ 今朝一緒に登校したばかりなのに、ワザワザ電話つてなんだ？

「もしもし？」

『あ、ごめんねキリオ、今だいじよぶかな？』

「あ、ああ、ヘーキだけど」

心なしか、ユウの声が緊張してるように聞こえる。

『今度の日曜…とかさ、時間、あったりする？』

「え、日曜！？」

しまった、驚いてつい声が高くなった。いくらなんでも立て続け過ぎだろ！？

『あ、ごめん、なんか用事入ってた？』

「日曜は、ちょっと用が…」

『そつか、ごめん。別に大した用じゃなかったから気にしないで』

「フリ…」

『うっん、それじゃね』

「おう」

電話を切つてすぐに、後ろめたい感情が俺を襲った。

ユウの誘いを断ったのは…、秘密を知りたいって気持ちからか、それともアイに会いたって気持ちからか。

いずれにせよ、自分の中でハッキリ答えが出せないと言っておきながら、今の対応はユウが“最優先”ではないことを示していた。

「くそう…、なんでこうも全部重なるんだ！」

それも違うか…、タイミングが重なってなきゃ全てに顔を出してい

いのかよって話だよな。

「くそっ、何やってんだ。もっとちゃんと考えろよ、俺」

「昔の俺と今の俺、どっちか気持ちをハッキリさせる必要があるんじゃないか」

第二話 4

日曜日、悩んだ末、俺が向かったのは高架下だった。

アイにしても非通知の女にしても、俺はどちらの連絡先も知らない。ということは、どちらかの約束はすっぱかすことになる。

だから俺はアイを選んだ。

別に秘密のことがどうでもよくなった訳じゃない。

だけど、それよりも気になったのは、アイが俺を知っていたってことだ。

二人は知り合いだったのか？ それともアイが一方的に俺を知っていただけなのか？

2時ちやうどに高架下へ着くと、既にアイが待っていた。

あの時と同じ…、河原を背にアイと猫がじゃれている。

やっぱり目が離せない。前に見かけた時は立ち尽くすだけだったけど、今は違う。

アイに引き込まれるようにして足が進む。

やべ、緊張してきた…。

アイのすぐ近くまでくると、じゃれていた猫が俺に気付いて逃げた。

「あ、ゴメン」

続いてアイも俺に気付く。

「や。いいよ、あの子は君の変わりだから」

「？」

日曜の真っ昼間とはいえ、人気の少ない河原に二人…。なのにアイは全くといっていいほど警戒がない。つまり、お互い顔見知りってことだ。

「来てくれてありがとう。お礼にいいこと教えてあげる」

これまでの寂し気な感じと違い、明るい口調で話し出したアイはどこか嬉しそうだ。

「いいこと？」

「私とアナタ、実は付き合ってるんだよ。知ってた？」

ええっ！ それって昔話？ それとも進行系なのか？

「付き合ってた…？る？」

アイの顔が少し赤くなったのが判った。

「る…」

うはっ！ ちょっとどうなってんだよ俺！ まさかの展開じゃないか！

どつりで妙にアイのことが気になった訳だ。

待てよ、喜ぶのはまだ早い。

最近の俺ときたら…、やたらユウと仲良くしてなかったか？ でも、

アイはそのことを詰^なつたりしてこない。なんでだ？

この間もアイは俺を無視して素通りしようとしていた…、それってつまり、もしかして？

「えっと、あの…、まさか俺の記憶のこと…」

「…知ってる」

げ！

でも…、そりゃそうか。

付き合ってたんなら、不自然だって気付いて当然だよな。

「だって、付き合った次の日からここには来ないし、すれ違ってても無視よ。普通あり得ないでしょ？」

「うわ、ご、ゴメンなさい！」

うひゃー、なんか色々つじつまが合ってきた。

「いいのよ、また一から始めれば。ただ、ウチってすごく厳しくてね、付き合つとかNGで、しかも歳下で、さらに記憶喪失なんて、ふふ」

「あははは…かんべんして…」

「だから、このことは絶対に秘密よ。約束だからね」

「ああ、わかった」

あれ、このシーンどこかで…？

!!

俺の顔色が変わったせいか、アイが心配そうに覗き込んできた。

「どうしたの？」

「いや、俺が唯一覚えてたこと…この場所で同じ台詞を…」

「覚えてるの!？」

“同じシーン”、“同じ台詞”、その後俺は記憶をなくした…。
ちよっと待て…! なんだこの漠然とした不安感は!?

まさか…。非通知の女が頭をよぎる。考えが悪い方に向かっている…。

「アイ…」

「何？」

「俺に電話したことある？」

「ないけど。私、携帯持たされてないから…。どうして？」

「俺、記憶をなくす前に誰かと電話で話してるんだ」

「…! それが私って？」

「いやゴメン! 判らないんだ、覚えてなくて。付き合ったその日

なら電話くらいするんじゃないかと…」

「確かにね。でもウチはアレだから…、電話すらできないし、ウチの番号は伝えてないからキリオがウチに電話することもあり得ないわ」

「そっか、そうだよな。良かった…」

「そっだよ…アイが非通知の女のワケがない。今だってほら、記憶はちゃんと残ってる。」

「良くない!」

「え!？」

「早く言いなさいよ、そういうことは!」

「え?」

「記憶がなくなる直前に電話で話してたんでしょ!？ 記憶喪失と関係あるかもしれないじゃない! 誰と話してたの!？」

「えらい剣幕だ。そりゃそうか、誰かのせいでこうなったのだとしたら、アイだって被害者だ。」

「いや、だから判らないんだってば! 電話は非通知だったし、けどそいつは俺の記憶のことを知っていた…」

「ねえ、それって本当に記憶喪失なの?」

「え、どういうこと…?」

アイは神妙な面持ちで思いがけないことを言った。

「もしも…、もしもよ、その電話の相手がキリオの記憶を消したとしたら…」

「…え?」

そんな可能性、考えもしなかった。単純に記憶喪失だとしか…。別に知らない病気じゃないし、誰だってなる可能性がある。たまたまそれが自分だっただけで仕方がないと思っていた。

「そんなバカなこと…」

あり得ない。

「わかってる。でも…、記憶がなくなる前に電話があつて、記憶をなくした後もそうして連絡がある。さっき言ったことは考え過ぎかもしれないけど、怪しい人物ってことは確かよ」

アイは腕組みをし、右手をあごの下に持っていた。きっと、あらゆる可能性を考えてくれているのだろ。それって俺の為…?

「やっぱり良かった」

「だから何が…」

「記憶をなくす前も今も、アイを好きになって良かった」

ずっと出た言葉に俺自身驚いた。

アイもびっくりした顔でしばらく固まっていたが、コクリと小さく頷くと俺に寄りかかってきた。

「淋しかったんだからね」

「ゴメン」

「キリオは謝ってばかり」

「はは、ホントだ」

「にゃー」

さっきの猫が戻ってきた。

「キリオ！」

「は？」

「今なんて？」

アイは“しまった”といった感じで顔を赤くした。

「だから淋しかったって言ったでしょ！」

俺の名前を猫に…？

ずっと待っててくれたんだ…。

“秘密”も“過去の記憶”もまだ判らない、
なことを気付かせてくれた。ただ、それ以外の大切

今日ここにきて…アイと話せて良かった。

第二話 5

「そろそろ帰らないと」

アイはそう言ったが、まだ日も暮れていない。

「え、もう?」

「門限」

さすがはお嬢様だ。

「ホントにあるんだそういうの」

「まあね。さっきは話切れちゃったけど…」

「ん?」

「今後、非通知の電話は一切出ないこと!! いーい?」

「…わかった」

すっかりアイに念押しされ、お互い河原をあとにした。

家に着くと待っていたかのように妹のサヨがリビングから出てきた。

「おかえりお兄ちゃん。さっき森戸さんって女の人から電話があったよ」

「森戸…」

ユウから？

「ああ、そっかサンキュ」

なんで家に？ 携帯にかけりやいいのに…。

携帯を見るとユウからの着信が二件、ついでにタケルからも一件入っていた。

しまった、それで家にもかけてきたのか。昨日はユウの誘いを断ちまったからな…。一応かけ直した方がいいよな？

自分の部屋に行き電気をつけた。

ブブブブ…

着信だ。ユウ、それともタケル？

「もしもし…」

電話に出る瞬間、一瞬だけディスプレイに“非通知”の文字が見えた。

しまった！！

『今回は早かったね』

この高いトーンは、やっぱりあの女の声だ。早く電話を切らないと。

『ユウは…』

！？

なんでユウの名前が出てくるんだ？　すぐに電話を切らないと。だ
けど…、こいつは俺が知っている誰かなのか！？

『ユウは今日、ずっと駅前でアンタを待ってたんだよ』

駅前？　どうして？

俺との約束じゃない。こいつまさか、俺だけじゃなくユウにまでち
よっかい出してんのか！？

「お前は誰だ！」

『アタシ？　あっはっはっは！』

女は受話器の向こう側で高らかに笑っている。

『アンタどうせ忘れちゃうのに聞いてどうすんのさ！』

この声のイントネーション…

『耳を澄まして考えても判らないよ！　特別な電話使ってたから
それと…アタシの声は電話ごしだと妙な力があってね』

もう少し、この感じ…思い出せそうなのに。

『…記憶を消すことができるの』

!?

「なっ!」

な…に?

ふざけてるのか!?

『もっと別の力が良かったのに、記憶を消すだけなんて。しかも都合よく操作することもできない』

とにかく話を延ばさない。

「何言ってるんだ…そうだ、秘密! 秘密って何だったんだ? どうせ記憶が消されるなら最後に教えてくれよ!」

『ダーメ』

「なんで!?!」

『アンタ…、今メモとってるでしょ? サヨナラ』

マズい! 電話を切らないと…

『リセット』

プー・プー・プー

つ
づ
く

第三話 まだ記憶がないっ！

「アイお嬢様。お申し付け通り、彼の交友関係とその友人を調査いたしました」

「ありがとう橘」

橘はうちの中でも特に優秀な執事だ。彼が調査報告をする時は、決まって有用な情報を持ち帰ってきている。

「それで、何か分かったことは？」

「“柳キリオ”、彼の症状は記憶喪失とは違ったようです」

「やっぱり…。それは記憶が操作されたということ？」

「はい、おそらく。ただ、記憶を操った方法や手段は解りませんが、該当者は一人に絞られました」

「そう…」

ごめんねキリオ…。こんな探偵みたいな真似ごととして。

貴方の友人を疑いたくはなかったのだけれど、あまりに貴方の様子が急変してしまったから…。

それに…。もう二度とあんな想いはしたくない。

翌朝、真相を伝えようと、キリオが家から出てくるのを近くで待つ

ことにした。

―どうしてキリオの記憶は消えてしまったのだろうか？―

ずっと抱いていた疑問…、それは昨日、本人に話を聞いて判った。キリオが何らかの“秘密”を知っていること。その“秘密”を記憶ごと消し去った人物がいること。

橘からの報告で、その人物が誰かも分かった。それがキリオの身近な人物であることも…。

緊急の要件なのに電話できない家の事情が煩わしい。いずれにしても、急いでキリオに伝えるべきだと足を運んだ。

「いつてきまーす」

出てきたのはキリオではなく女の子だった。妹さんかな？

そういえばキリオって朝弱いんだった。学校で待つべきだったかな。そんな心配を他所に、しばらくするとすぐにキリオは出てきた。なぜか妙にキョロキョロしている。

「ぶつ。なんかキリオってば挙動不審。意外な一面見ちゃった」

それはそうと、早くキリオに伝えないと。

「おはよー」

声をかけつつ駆け寄ると、キリオもこちらを振り返った。けれど少し不自然な間が空いて、お互いの目が合った時、キリオは

やつと呼ばれたのが自分だと気付いた。

「…えつと君は？」

なんかキリオの様子が変だ、私のこと判ってない…？

「キリ…」

待って…、まさか！？

「あつ、いえ、人違いでした。ゴメンナサイ…」

何を謝ってるんだろう私。でも、この感じは前にも一度経験したことがある…。なんで？ どうして？ やつとまた距離が縮まったと思っただのに…。

キリオはゆっくりと私から遠ざかってゆく。
離れたその場所から声がする。

「おっす！ キリオ！」

キリオの親友の大和タケルだ。

「お、おっ」

「おっはよっ！ 二人とも」

あの女…！

「おっす！」

「お、おう」

「な〜に、キリオ何か変だぞー？」

「だろー」

こっちを見て女が笑っている。

やられた…！

さらに女はキリオに何か話している。何を言っているの？

少しするとキリオだけこっちに帰ってきた。私と目が合うと、キリオは軽く会釈して通り過ぎようとする。

「ちよつと、学校はそつちじゃないですよ」

「知ってます。友達の家に寄るんで」

！？

友達って、森戸ユウのこと？

でも、あの子は朝練に行ってるはず…、まさか今日はまだ家に？

あの女さっき笑っていた…、いったい何考えてるの…？

頭の中では色々な憶測がぐるぐるしながらも、遠ざかるキリオを黙って見ているしかなかった。

今回も、その前も、付き合った次の日にキリオの記憶が消された…。偶然じゃなく目的があるのだとしたら…、狙われてるのはキリオ？それとも私？

第三話 2

―またキリオの記憶が消された―

あれから私はキリオの行動を追っている。

以前は何が起きたか解らず、ただシヨツクのあまり塞ぎ込んでしまっただけで、今は違う。

私だって、いつまでもじっとしたままじゃない！

あの女は消した記憶の確認か、あるいは別の目的があるのか、どちらにしてもキリオか私を監視する為に近付いてくるはずだ。

私がキリオを、橘が私を尾行する。何も知らずにあの女が尾けてくれば、二重尾行になる。まさか自分が尾行されるとは思ってもいないはず。

遠目に追い続けるキリオの背中…、今日は一人。

この道は、キリオが家に帰るにしてはだいぶ遠回りみたいだけど…。

…！

こっちは…、あの高架下の方だね。

キリオとの思い出が蘇る。あそこで二人は付き合う約束をした…。

記憶をなくしても、どこか頭の片隅で覚えていてくれるのかも…しれない。

だけど、そんな私の淡い期待はすぐにひっくり返った。

河原には…森戸ユウの姿があった。

どうしてあの子が？

キリオは彼女に近付いてゆく。

な…に…コレ？

私と森戸ユウが入れ代わったようなシチュエーション…。

何が起きているの？

まさかキリオ…、こんなことで付き合ったりしないよね？

駄目だ…見ているのが辛い。

弱気な自分が現れ、その場を去ろうと振り向いた先に、あの女が立っていた。

「貴女…！」

思わず声をあげてしまう。

しかし、女はとぼけた顔をしている。

「え、アタシ？ どこかでお会いしましたか？」

「このっ！」

「あっ、すみません。うちの学校の先輩…ですよね？」

「白々しい！ ふざけないで！」

カッとなってさらに声が大きくなる。

一瞬、間を空けて女はやれやれといった感じで続けた。

「あまり大声を出すと、あの二人の邪魔になりますよ」

目でキリオと森戸ユウを見る。
いつの間にか二人はなんとなくいい雰囲気になっている。

「なんかお似合いですよーあの二人。あはは、髪の色も一緒だし」
何が言いたいのよ？

「それじゃ先輩、失礼しまーす」

女はそう言って一礼すると、河原に降りていった。

「ユウー、キリオー」

ちよつと…！？

キリオか私の後を尾けさせようと考えていたのに、どちらにも直接絡んでくるなんて…！

まさか牽制してるつもり？ こっちの思惑が読まれてるなんてこと…、そんなはずはない！

だとしたら、あの女の目的は何？ キリオと森戸ユウをくつつけること？

いや、そんな理由でキリオの記憶を消すなんて考えられない！ 必ず裏があるはず！

こうなったら徹底的にあの女を調べるしかない。

第三話 3

調査の相手は“一之瀬カオル”、高校二年生。

彼女はキリオの隣の家に住んでいる。

性格は明るく社交的で交友関係も広い為、常に誰かと一緒にいることが多い。

学校には毎朝決まって大和タケルと一緒に登校している。

しかし、二人は付き合っていないらしい。どうやら大和タケルの方が一方的に好意を持っているようだ。

学校に着いた後は、親友でクラスメートの森戸ユウとほとんど一緒に行動している。

放課後だけは別々で、森戸ユウが陸上部に出ている間、一之瀬カオルは生徒会室で時間を潰し、二人は待ち合わせて一緒に帰っているようだ。

ここまで調べてみて気になったことがある。

彼女は常に誰かと一緒にいて、一人でいる時間が極端に少ない、ということだ。

そんな中で、彼女はキリオに何度も電話をかけていたことになる。

結局…、判らないことだらけか。

今判っているのは、キリオの記憶を操作したのは一之瀬カオル、彼女だろうということだけ。確証はない。

消去法による見解なので、あくまで憶測レベルだが、行動や言動、動機のいずれにおいても彼女は全てに該当する。

なにより私にとっては彼女と直接会って話したあの印象が色濃く残っている。

だから今は少しでも証拠がほしい。今日は日曜日…、彼女が行動を起こすとすれば休日以外に考えられない。まず間違いなく外に出かけるはず。

「…！ 出てきた…」

同時に彼女の尾行を始めた。

…それにしても、いったいどこに向かっているのかしら？

森戸ユウの家でもない、学校でも駅でもない。この先は河原沿いの道だけど、いつもの高架下の方でもない。

でも、今は予想外に動いてくれた方がいい。こっちも行き詰ってたんだ、何か新しい情報が得られるかもしれない。

それにしても、“記憶操作”なんてこと…現実的にできるものかしら？

方法どころか何が引き金になるかすら判っていないし、それって、仕掛けられたら防ぎようがないってことよね…。しかも証拠は残っていない…。

もしそうだとしたら、私のやろうとしていることに意味はあるんだろうか。

ううん、意味なんて必要ない。

私とキリオの仲を二度も引き裂いたんだ…、このまま見過ごすことなんてできない！

一之瀬力オルはいつもの高架下ではなく、ひとつ隣の小さい橋を渡り始めた。

こちらから見ると、いつもの高架下は随分遠くに見える。向こうの

方が川の下流なので、ずっと川幅が広いからその分橋が長いのだと改めて気付いた。

あの場所は…私とキリオの思い出の場所。でも、キリオのその記憶はもう上書きされてしまった。相手を森戸ユウに変えて…。

その一件以来、キリオと森戸ユウは明らかにお互い意識し合っていて、進展していた。

一之瀬力オルが歩きながら携帯を取りだした。着信かな？ 違った、彼女からかけるみたいだ。

「あ、もしもしーユウー。×××××…」

この距離だと、かすかに聞こえたのは始めの名前のところだけ。森戸ユウに電話をかけているみたいだけど、なんでわざわざこんなところから？

少しすると彼女は急に足を止めた。

ええっ、ちょっとちよつと！ なんで止まったの！？ まさか尾行が気付かれた？

特に警戒してた様子はなかったはず、だけどマズイ…、橋の上は見通しが良すぎて隠れる場所がない。

ここそのまま歩いてやり過ぎるか…、立ち止まるのは不自然だし、引き返すのはもつと怪しまれそうだ。

彼女は橋の手すりに肘をつき、例の高架下の方を見下ろすと別のところに電話をかけ始めた。

『あっはは。だーれだ？』

！！？

なに今の声！？　まるで別人じゃない！

さつきより彼女と私の距離は近くなっている。声だってより鮮明に聞こえるはずなのに…聞き間違えるなんてことは有り得ない。

『ねえ、これから駅前にこれないかな？』

この声って…、よくテレビなんかで見る匿名の音声みたいだ。まさか、これが記憶操作に関係してるんじゃない？

待つて、今は会話の内容に集中して聞き逃さないようにしないと。幸い彼女は電話に集中している。今ならこのまま後ろを素通りしてもやり過ごせる。

でも、これは逆にチャンスかも。何でもいいから、証拠の決め手となる会話が聞ければ…、それに電話の相手も気になる。相手はキリオじゃないの？

『いいの？　例の秘密、知りたくないの？　今から駅前のパン屋“サンライズ”に来れば教えてあげる』

この女、今“秘密”って…！！

間違いない！　電話で話している相手はキリオだ！　この変な声でキリオを操作してたんだ！

私が今日、この場所を、このタイミングで通ったのはきっと…、私自身の手で、この女を裁けということなんだ！

「一之瀬力オルっ！！」

私は彼女の方に向き直り、力強く声を上げた。全てをここで終わら

せる為に。

第三話 4

急に呼び止められ、一之瀬力オルは驚いた顔でこっちを振り向いた。まさかこんなところで誰かに声をかけられるとは思ってもみなかったらしい。

どんな人間でも咄嗟とっさの出来事には冷静な対応ができない。

それは彼女も同じ、“どうやってこの場を乗り切るか”と、今は頭をフル回転させているはず。

でもそんな猶予は与えない。私は目配せで橋に合図を送る。

近付いて来るスーツ姿の男が私の関係者だと解るよう、わざと手をかざし適当な位置で橋を止めた。勿論、逃げることはできないと暗に示して、ここで私と話しをさせるのが狙いだ。

彼女は私と橋を見てすぐに自分の状況を理解したのか、自分から口を開いた。

「あら先輩。またこんなところで、奇遇ですねえ」

「今更、言葉を選んでしゃべらなくてもいいんじゃないかしら」

こう言えば、さっきまでの通話が聞かれてたって判るわよね。

でも用心深い彼女のことだから、いくらでも言い逃れしてくるでしょうけれど。

「ふーん…、そちらはお連れさん？　もしかして、アタシのこと嗅ぎまわってたとか？」

へえ、正面から向かってきた。まともにやり合ってくれるのなら好都合だわ。

「さつきは誰とお話ししてたの？」

「それは…、先輩に言わなきゃいけないことですか？」

やっぱり切り崩しが足りない…、でも決定的な情報は揃ってないし、だからといってこの機を逃すわけにはいかない。

「電話の相手は柳キリオ。あなたの幼なじみよね？　なのにどうして他人を装って電話しているのかしら？」

「…ふふ」

この子、笑った？

「先輩、カマ掛けるなら、もっと上手くやらないと駄目ですよ。アタシが一言、キリオじゃないって言ったらどうするんですか？」

！？

「…そう言われたら終わりね。でも貴女は私と話してくれた。自分がやったことを認めてくれるんじゃないかと思ったのだけれど」

「認めるって…、アタシなにかしましたっけ？」

ちょっと強引だけど…。

「キリオの記憶を消したのが貴女だってことは、とくに判ったのよ。でも記憶を操作した方法がどうしても解らなかった…。まさかあんな方法だったとはね」

私の言いたいことに気付き、一之瀬力オルは何かを口に吸い込んだ。
薬…！？

まるでスパイ映画のワンシーンかと錯覚した。まさかの結末…って
ことはないわよね！？

シュー

「え？」

『ほ、ら、面白いでしょ？ 声が変わるの。ね、さっきのイタズラ
電話もこれで』

イタズラ電話！？

『えっと、記憶…操作でしたっけ？ それって何のことですか、先
輩？』

やられた！

彼女は小さなボンベを持っていた。中身はヘリウムガス？

なんでそんな物…、まさかこれも想定内なの？ しかも、声を変え
て電話してましたって…、あのさっきの電話を“イタズラ”にして
開き直るつもり？

でも、確かに記憶操作についての証拠はない。まさかこんな形で白
を切るなんて…、そうはさせない！

「橘！」

こうなったら調べた洗いざらいの情報を突き付けて…

『あ、あー、ちょっと待って…』

彼女は掌を私に向け、発声を始めた。

「あー、ん、んん！ よし、だいぶ声が戻ったかしら」

ヘリウムガスを使い切ると、彼女は背伸びを始めた。

「んー、先輩もういいよ。どうせ誰にも証明できっこないもの」

彼女は私に背を向けて、再び橋の手すりに肘をついた。あの高架下を眺めているようだ。

「キリオの記憶を消したのはアタシ」

「な！」

どうしたっていつの急に？　今で彼女が折れる必要はなかったはず。

「きっと先輩が一番の被害者ですね。今までのことは素直に謝ります。ごめんなさい。何ならあの二人にもこのこと全て話してもいいです」

「何？　何考えてるの貴女…？」

「くつくく…、ああ、ごめんなさい。アタシ今、謝ってるところでしたっけ？」

一之瀬力オルの態度が急に変わった？ どういうこと？ 犯行を認めたのに、まだ何かあるっていうの！？

まさか！ 私の記憶も消そうっていうんじゃない？
思わず足が後退る。あとずさり

「あーおっかし、別にアンタの記憶は消さないよ。追いつめられてるのはアタシじゃなくて、先輩の方だし」

「どういうこと？」

「先輩がアタシにやつきになってる間、あの二人、キリオとユウはいい感じになっちゃってたでしょ？ あれ、アタシの仕業」

「このっ！」

「先輩、アタシに構い過ぎてあそこの高架下にも行っていないでしょ？ キリオは何度か来てたみたいだけど」

「！」

「あっはっは、でも大丈夫。“キリオ”も“猫のキリオ”も、ユウが面倒みてくれるから。あっははは」

「なんでそれを！？」

「アンタって本当にお嬢様なのね」

一之瀬力オルが意味ありげな台詞とともに橋の方を見た。

「どういうこと…まさか？」

私も橘を見ると、橘は視線をずらし顔を伏せた。
思わず唇をかむ。

「仕えの人はアンタを心配してるんじゃない。いつでも家のことを心配してるんだよ！ アンタの相手はキリオじゃ駄目ってさ！」

「橘！ どういうこと！」

「申し訳ございません。隠していた訳ではないのですが、旦那様にどこからか連絡が入っております…」

どうりで…、急に門限が厳しくなったり、電話をかけることさえ制限されたり…。

一之瀬力オルを睨みつける。

「くつくく…」

「何がおかしいの！？」

彼女は笑いを抑えきれないといった様子で続けた。

「いや、おかしいでしょ。アンタが必死に色々嗅ぎまわってくれたおかげで、確か“非通知の女”だっけ？ キリオはアンタを疑ってるんだよ。あはははは傑作！」

「そんな…！」

目の前が一瞬真っ暗になると、全身の力が抜けたようにしゃがみ込

んでいた。

「だから今さら本当のこと話したって、今の状況が逆転することは絶対ないね！ ユウは一途にキリオを想い続けてたけどアンタはどうだった？ ははっ！ もう元には戻らないんだよ。そう…、アタシの力を除いてはね…」

！？

駄目だと判りつつも、自分の肩がビクッと揺れたのが情けなかった。思わず彼女の言葉に反応してしまった。

彼女の言う通り、途中からキリオとの関係が絶望的になって、私は“一之瀬力オル”の調査に没頭し、そのことを見ないようにしていたんだ。

「いいの？ このままだとあの二人、付き合っちゃうよ？」

許せない！ この女！

「キリオとユウは今ちよつと喧嘩中でね、お互い仲直りするキツカケがほしいのよ。そこで、私がキリオを連れて高架下に行けば、晴れて二人は…」

許せない…、でもそれは私自身も…。

「さっきの電話で、謎の女を演じてキリオに発破をかけておいたの。人っておかしいでしょ？ 追いつめられると意思が強くなるの。ま、どっちに転ぶも私次第なんだけど」

一之瀬力オルの勝ち誇った顔が私を責め立てる。

悔しい…。

！？ 責める…？ なにを？ 何だろっこの違和感？
とても正確な判断ができそうにない。私はどうすれば…？

彼女は来た道を戻ろうとしている。

このタイミングを逃してしまったら、本当にキリオとは…。

彼女は最後にもう一度だけ念押しした。

「それじゃあ先輩、アタシもう行っちゃいますけど、本当にいいんですか？」

いいわけないじゃない…。

でも、声にできない。

#つづく

第四話 真実がわからないっ！

「ほら、ユウはあそこだよ！」

カオルに促され高架下^{つなが}に目をやると、そこにはうちの学校の制服を着た女子がいた。

茶色いショートヘアがなびいたかと思うと、彼女がこっちを向いた。

ユウだ。

腕には黒い猫を抱えている。

一瞬誰かと見間違えたような…、いや、気のせいかな…。

それに…このシチュエーション、前にもどこかで…。

河原、高架下、少女、猫…。

「ほらキリオ、ユウを待たせるなって」

カオルが俺の背中を押す。

「お、おうつ」

押された余韻のまま、河原まで下る。

「きゃっ」

さっきの猫が俺に驚いたのか、ユウの腕から逃げ出した。

「あ、ごめん」

ユウは首を振って答える。

「うっん、いいの、本物が来たから隠れちゃったのかな」

本物…？

「あの子、“キリオ”って名前なの、だから」

「なーる…って、俺の名前つけたの！？」

「やつ、私じゃないよ！」

ユウが慌てて手を振る。

確かに、ユウにしては大胆な気がするもんな。

「まだ付き合ってもいない人の名前つけるなんて…、ただの偶然だろうけど、たまたま“キリオ”って呼ばれてるの聞いて、それから気になっちゃって…」

「そーなんだ」

ん？

「今の“まだ”って…」

「あ、や、それはあの…」

ユウは否定も肯定もできず、それが却^{かえ}って言わんとしていることを強調する。

「これから…じゃなくって！ あああ、私なに言ってるんだろ？」

「ユウ」

「えっ、は、はいっ」

「俺と付き合ってくれない？」

自分でもビックリするほど言葉がスツと出た。でも言われたユウの方がビックリしたみたいで、固まってしまった。

少しすると俺の顔をじっと覗き込んできた…っつーか、目！ だから目え怖いって！

ただでさえ目がでかいのに、さらに見開いてるし！

「うんっ…！」

え？ 今“うん”って…

そう言った瞬間、ユウは首を縦に振ってそのまま俯うつむいた。
えっと…

また急にユウが顔をあげたと思ったら…

「うん！ うん！ うん！」

おっ、なんだなんだ？

返事はOKってことみたいだけど、凄いテンパってるなあ。

「あ、や…判った。1回でいいから」

「うん。うれし…」

素直だなあユウは。

「俺も」

「そこでちゅーっと…」

「え！？ おわっ！ カオル！」

「カ、カオル？ なんで？」

そっぴやコイツがいたの忘れてた。
ユウもビツクリしてる。

「おまつ…ずっと見てたのかよ！ そこはハズすだろフツー！」

「ごめんごめん、いい雰囲気だったのにお邪魔しちゃった」

両手を合わせて謝ってるが、舌が微妙に出ている。なんだその茶目
っ気は、確信犯だろ！

だけど…、態度とは裏腹にカオルの顔は寂しそうに見える。なんか
目も微かに潤んでないか…？

「カオル…、お前…」

カオルの頬を涙がつたつた。

「あれ…、おかしいな、あれ？」

「カオル…」

ユウも心配そうに声をかける。

「あはは、うれし涙」

「え？」

「ユウは私の親友だから…すごくうれしい。これで安心できる」

「カオル…」

「あと、ちょっと淋しいのもあるかも。ユウを取られちゃって…、
こっぴどいのも嫉妬って言うのかな」

「べ、別にとっちゃいねーだろ」

「そだね。でも、おめでと二人ともっ！」

「わっ」

「きゃ」

カオルはそう言って、俺とユウをくっつけるように押し当ててその
場から離れた。

「このやろっ」

ユウは顔を真っ赤にしている。

カオルは道路側に駆け上がったところで振り返った。

「じゃあねユウ、また明日学校で！ お昼はアタシとだかんねー！
キリオもじゃあね！」

「俺はオマケか！」

カオルは手を振りながら帰っていった。

「つたく、あのおせっかいめ！」

「でも…カオルには本当に感謝してる。色々と私のこと励ましてくれたり、キリオとのことも仲直りのキツカケを作ってくれたし」

「そうだな…。いい奴だよな」

「うん！」

ユウの満面の笑みにクラっとくる。
「つか、これだけ可愛かったら誰だってイチコロだろ。うわ、“イチコロ”ってオッサンか俺は。
でも本当、カオルには感謝だな。」

「ねえキリオ」

「ん？」

「明日…一緒に学校行かない？」

ユウが大きな目で覗き込んでくる。
駄目だその目は、なんでも“うん”って言うちまいそうだ。

「せっかく付き合うことになったんだし、ちよつとだけ浸りたいな
って…。ほらっ、お昼はカオルと一緒にだし、だから朝」

「ユウ、朝練は…」

「明日だけは朝練サボりっ」

あの真面目なユウがサボりって、相当うれしいんだな。

「だからキリオも」

「ん、俺？ 部活入ってないぜ」

「ちがーう、キリオは遅刻ばかりだから。明日だけは遅刻サボっ
てよね」

「おう…っ」

やっべ、いちいち可愛いなユウめ！

この雰囲気だったら…その…、そつとユウに伸ばした手が空を切っ
た。

あれ？

いつの間にかユウは俺の隣から移動していた。

「じゃ、今日は帰るね！ 明日の朝キリオの家に迎えに行くからね
！」

「え？ ユウ、帰るって、じゃあ送ってくよ」

「ごめん、今すつごく走りたいの！ キリオも走る？」

え？ 走る？ いや、ついてけねーだろ。

「ああと、やめとく」

「ははは、だよ。じゃあね！」

「おう、こけんなよ」

きつと、うれしくて何かせずにはいられないんだろうな。
それにしても健康的な…、邪な俺とはエライ違いだ。

一緒に登校か…、思い返すと今頃うれしさが込み上げてきた。
なんだよ、青春してんな、俺！

第四話 2

「さーてと、俺も帰ろっかな」

河原から道路側に続く坂をゆっくり上る。

「柳君」

急に呼び止められ顔をあげると、そこにはどこか見覚えのある人が立っていた。長い黒髪が印象的な…確か一つ学年が上の“倉木アイ”…さん。

以前、勘違いで呼び止められたことがあって、その時も綺麗な人だなーとは思ったけど、そんな人が俺に何の用だろう？

「ねえ、さっきの子と君は付き合ってるの？」

「え？」

おいおいこの質問、もしかして俺って今モテ期か！？

「いや、付き合ってるかと聞かれると…」

待てよ…“さっきの子”って言ったか？

河原から道路まで上がった時はもう俺一人だったはず…ということ
は、その前のユウと一緒にいる時から見てたってことだよな？

何かひっかかる、この感じ…、いつの間にか監視されているような
感覚…。

電話の…、そうだ！ 例の非通知の女！

いやまさか、もしそうなら、こんな堂々と出てこないだろ？

そもそもこんな綺麗な…、って違う違う！ でもこの間も俺に声をかけてきたし…、ああダメだ俺、気にし過ぎだったの！

でも、正直悪い気はしないんだよな、今だってそうだ。

けど、万が一にも非通知の女だったら…

あああ、マズい、このままずっと黙ってたらこっちが不審がられる。せつかく今は何もかも上手くいっているんだ、トラブルは避けないと。

「あ、えっと、スイマセン、俺、さっきの子と付き合ってるんで…」

「どうして謝るの？」

「え、ああ本当に、何謝ってんだろ俺。す、すいません。失礼します」

その場に居づらくなって俺は小走りで去った。

なんで謝ったんだ俺…、なんか悪いことしたっけ？ 倉木さんが悲しそうな顔してたからつい…。

いや、綺麗だとか悲しそうな顔してたとかで油断したら駄目だ。どう考えても彼女と俺には接点がないし、モテ期なわけもない。

不自然だろ、何かあると考えるべきだ。

一応みんなにも倉木さんのことを聞いてみるか、誰かを介した共通の知人だったらマズいしな、それこそ平謝りしないと。

でも、もし誰も知らないようなら…警戒する必要があるよな。

後日、タケルやカオル、ユウにヒロ、念の為シンには電話で確認し

たが、誰も彼女のことは知らなかった。
つまり、要注意ってことだ。今後はできるだけ彼女に関わらないよ
う気をつけないと…。

第四話 3

あれ以来、俺はユウの部活を待って一緒に帰っている。

でも今日はユウとカオルが二人で駅前に寄って帰るというので、久しぶりに俺は一人で帰っていた。

遠回りなのに河原沿いの道を通ってしまう。ユウと一緒にの時はともかく、一人だつてのにおかしなもんだ…。

そういやこの川ってかなりデカイよな。

兩岸をまたいで大きな橋が何本もかかっているが、中でもいつも立ち寄っている高架下の橋が一番長い。

その中途半端な長さ故か、歩道があるにも関わらず車専用状態だ。歩いて渡ってる人を見かけたことがないし、自転車ですえ稀に通る程度だ。

…って、渡ってる人がいる！ あれ…、うちの学校の女子じゃないか！ しかも走って…

「まさかユウじゃないよな！？」

なんて冗談めかしていたら、ユウではなかったが、どこかで見覚えが…、

“倉木アイ”だ！

あの長い黒髪といい、どこかお上品な走り方といい間違いない。何やってんだお嬢様が…？

橋の中央に差し掛かるうとした時、河原からスーツ姿の男が二人上がってきた。その二人も橋を渡りだす。

今日はこの橋やけに人気だな…、なに呑気なこと言ってたんだ俺は！

あれはどう見たって追われてるじゃないか！ 黒スーツだぜ？

ただ事じゃないだろ！

いや…でも彼女だって俺からすれば要注意人物だ、できるだけ関わらないようにしようって決めただけかりなの…。

アイが橋を渡りきった時、男達は橋の中央まで迫っていた。

おいおい、差が縮まってるじゃないか。

「くっそ、なんだってこんなことに…」

とにかくあれこれ考えるのは後だ！

アイは橋を抜けると左手に向かった。その進行先を確認すると、川上の橋が目に入った。

地形上、川上にあるあの橋を使えば先回りできそうだ。

そのことに気付くと、アイとスーツの男達を目で追いながら俺は走り出していた。

幸い向こう岸にはオフィス街が集中している。そこに紛れ込めば追っ手を撒けるハズだ。

川上の橋は川幅が狭くなった分、橋の長さが丁度良いせいか人も自転車も多かった。向こう岸を走るアイを見逃さないよう注意しながら走る。

このままお互い真っ直ぐ進めば合流できる…と思った矢先にアイは細い路地に入ってしまった。

「ちよっ、待った、見失っちゃう！」

いや…、アイなりに追っ手を撒くつもりなんだ。来た道に戻るのには考えにくい…だとすればこのまま進んでいれば、追っ手より先にア

イと合流できるはずだ。

橋を渡り切った頃には既に息はあがっていて足だってあがらない。

「くそっ！ きつっ…」

こんなことなら普段から運動しときゃ良かった…。

さっきの路地を抜けてくるんなら、そろそろ合流してもいいはずだ…と思うと同時に、少し先の曲がり角からアイが飛び出してきた。

「来た！」

アイもこっちに気が付いた…はずなのに、急に進路を変えた。

「バカ！ そっちに行つてどうすんだ！」

すぐにアイの後を追いかける。

「なんで貴方がここにいるのよ！？ ああもつつ、そうじゃない！ ついてこないで！」

あれだけ走つてこの元気、なんだよお嬢様、結構タフじゃないか。

「なに言つてんだ、追われてんだろ！ その先の道を左に入れ、オフィス街がある！」

「私に指図しないで！」

アイは「ふん」って息を荒くしてたけど、左手を見ると素直に曲がった。オフィス街に入った方が得策だと判断したようだ。

なんだよ素直じゃないな。

案の定、そこは予想を超える人でごったがえしていた。会社によってはちょうど退社が始まった時間だ。放っておいてももつと人が増えるはず。これなら自然と人ゴミに紛れ込むことができる。

ほんの5分もしないうちに追っ手を振り切って…正確には見失ったのだが、とりあえず適当なビルに隠れ、そのまま人気のない地下の駐車場まで移動した。ここなら誰か来ても足音ですぐに判る。

着いてしばらくは、二人とも肩で息をしながら呼吸を整えるので精一杯だった。アイもあまり走るのは得意じゃなかったようだ。そりゃお嬢様だもんな。

それでも先に口を開いたのはアイの方だった。

「私とは関わらないんじゃないの？」

「そ、そんなこと言った覚えはないけど」

「でも、あからさまに避けてたでしょ？」

しまった、態度まるわかりって…、俺ダッセ。
だけど今回のことは…

「そんな場合じゃなかったろ？」

「ふーん、否定しないんだ」

「あ、いや…」

「ふふ、冗談よ。でもいいのかしら？」

「何が？」

「これだって罾かもしれないわよ」

ギクッ

まさか…？　ここまで全力疾走だぜ…。

「さすがに演技には…見えなかった」

「そ」

軽くそう言つと、アイは背を向け携帯を取り出した。

誰かに電話をかけている。

おいおい、本当に罾なんてことは、ない…よな？

「ああ、橘、私。状況は？　うん…、そう…、それで…」

アイは淡々と話している。

“橘”？　彼氏だろうか？　違うよな、彼氏と「状況は？」なんて会話はしないだろう。

「こっちはなんとか振り切ったけど、素性は割れてない？　そう…」

おいおい、なんだよ探偵ごっこかよ。

「それで少しマズイことになったの、ちょっと足を回してくれないかしら？　できればバイクがいいわ。あ、二人分ね。え？　そうよ、二人！　よろしく頼むわね。場所は…」

アイの電話が終わった。

マズイってなんだよ、俺のことか？
それにしても…

「お嬢様も携帯なんか持つんだな」

アイは少しだけ携帯に目をやった。変な質問だったか？

「つい最近ね…。ほら、近頃ぶっそうじゃない？」

「なあ…」

「質問は終わり。すぐにここから出るわ。迎えを寄こしたから貴方は帰って」

「なんだよそれ、何がマズイんだよ？ なんの説明もなしかよ！」

「ある訳ないじゃない！ 貴方が勝手に絡んできたんでしょ！ お陰で余計な手間が増えちゃったじゃない！」

なんだろう、俺、少し緊張してる？

「アンタ、何度か俺に声かけてきたろ？ あれは何だったんだ？」

アイは長い溜め息をついた。

「貴方、森戸さんと付き合ってるんでしょ？」

「な、なんだよ突然、それがどうかしたのかよ」

アイはさらに溜め息をついた。

「はい、おめでと。だから話はおしまい」

「いや、判んねえって!」

「貴方、記憶なくしてるでしょ?」

「う…、なんでそれを?」

「それともうひとつ、私のこと疑ってるでしょ?」

「いや、それは…」

「ほらね。それで、何で私が貴方に何かを教えなきゃいけないの?」

ドルン…

駐車場内にバイクのエンジン音が響いたかと思うと次第に大きくなった。さっき言ってた“迎え”ってやつだ。

アイは特に言葉も交わさず、現れたバイクの後ろに乗るとヘルメットをかぶった。

…なんか気に食わねえ。

「じゃあね、バイクはもう一台くるから、貴方はそっちに乗って」

「あ、待てよ…」

アイはこっちに目も向けず、突き離すように言った。

「サヨナラ」

ドルルン

轟音と共にアイは去ってしまった。

心なしか強く放たれた「サヨナラ」って言葉が耳に痛く残った。

それから程なくして、アイの言った通りもう一台バイクが現れ、俺はそれに乗った。

全く関係ないけど、男が運転するバイクの後ろに乗るって…なんか屈辱だ。

アイが…、誰かの運転するバイクの後ろに乗ったのも気に入らない。さっきの「サヨナラ」だって、なんだよあれは…。

色々嫌なことばかりが頭の中で繰り返し返される。それを紛らわそうと、走行中は記憶や秘密のことを考えるようにした。

俺の記憶…、非通知の女…、今回の件…、少し疑いはしたけど…アイは犯人じゃない気がしていた。

バイクは学校の前で止まり、俺はそこで降ろされた。なんで学校？ 尾行とかを考えて足がつかないようになって配慮なのか？

でもそれは、裏を返せばアイが危険なことに足を踏み入れてるってことになる。もしくは俺自体が無関係じゃないってことも…。俺はバイクを運転していた男に尋ねた。

「なあ、いったい誰に追われてたんだ？」

男は何も答えない。

ドルルン

バイクのエンジンをふかしている。

反射的にバイクの前に出てハンドルを押さえつけた。

「頼む、教えてくれ！」

スモークがかったヘルメットのゴーグルからは男の鋭い目がうつすらと見えた。その目は俺を攻撃せんとばかりに睨み付けていた。思わず尻込みするが、俺は一瞬たりとも男から目を逸らさなかった。ここで目を逸らしたら、何も判らないままになる。

ドルルン　ドルルン…

男は二、三回エンジンをふかしたが、少しして諦めたかのようにふっと力を抜いた。

「…お嬢様を巻き込まないでほしい」

本当に“お嬢様”って呼ばれてたのか。それじゃ、こいつらは使用人？

なぜか少しホツとしている自分がいた。

「手を貸すのは一度きりだ。やつらを仕切っている人物の名は…、
“中川シンヤ”」

第四話 4

追われているアイを助けようとしたり、バイクの男に食い下がったり…、なんか最近の俺はどうかしてる。

ただの思い過ごしかもしれないけど、この一連の出来事は俺と関係があつて…、知ってる奴が絡んでるんじゃないかって…思った。

そこには、まだ一人だけ顔を合わせていない人物が浮かび上がった。

そう…“シン”だ。

バイクの男から聞き出した人物の名前は“中川シンヤ”。

“シン”と“シンヤ”は…、同じ人物なんじゃないだろうか。いや

…、まだそう決めつけるのは強引過ぎる。だから確かめるしかない。

明日、隣町の高校へ行こう。

翌日、アイは学校を休んでいた。昨日のことが関係しているのだろうか。

親御さんにバレたとか？ それともまさか…昨日の今日でまた危ないことに首を突っ込んだんじゃないだろうな…。

とにかく急いだ方が良さそうだ。

それと、ユウには声をかけておかないと。変に心配させるといけな

いからな。

放課後、俺は部活に出る前のユウをつかまえた。

「ユウ、悪い。今日ちょっと用があつてさ、一緒に帰れないんだ」

「そっか…、うん、わかった」

ユウは何の詮索もなく返事を返してくれた。それが逆に心苦しい。

「ホントごめん。明日は一緒に帰れるから」

「いいよー、そんなに気にしないで」

お互い笑顔で手を振った。

—ここが一つの分岐点になるかもしれない—

ユウと帰っていれば、これまで通りの日常が続いたのかもしれない。けどあのバイクの男の口ぶりからすると、おそらくアイを巻き込んでしまったのは俺だ。

だから、アイが何に首を突っ込んでいるのか、俺は突き止めなきゃならない。

こればかりは確証も何もないただの勘だけど、おそらく全てのことに関わっているもの…、それがあの“秘密”なんじゃないか。

その足掛かりに、“中川シンヤ”が何者かを確かめる必要があるんだ。

河川敷にかかる橋を渡りながら、頭の中で色々な考えを巡らせる。俺の集中力を散らしたのは、目の前に見えた力オールドだった。なんでこんなところに??

別に今は下校時間だし、その辺をうろついていたからって何ら不思議はない。

だけどここは違う。橋を渡ったこっち側にうちの学校の生徒がいる

のはおかしくないか？ 俺だって特別な用でもなきゃここにはいない。

特別な用…、カオルがこっち側に来る理由っていったいなんだ？

気付くと俺は、カオルの後を尾けていた。特に迷うことなく歩くカオルは、以前もここに来たことがあるのだろうか。嫌な予感がする。

着いた先は、とある学校だった。部活している生徒や下校中の生徒をみる限り、俺たちと同じくらいだから高校だろう。

嫌な予感は益々大きくなる。

俺は近くの高台から、気付かれないよう遠目に様子を窺うことにした。

カオルは俺とユウの仲をとりもってくれた。本当に感謝してる。それは俺だけじゃなく、ユウだってそうだ。

「頼むから勘違いであってくれよ…」

カオルは学校の敷地内に入ると校舎脇を通り、焼却炉の辺りで止まった。他の生徒達はカオルを珍しげに見るが、特に気に留める様子はない。

「誰かを待つてるのか？」

そこへ若い男が一人近付いてきた。周りの生徒達の反応を見る限り教師のようだ。

カオルは男に気付き会釈をした。間違いなくこいつに用があるようだ。

「なんだ…、考え過ぎだったか」

確かカオルは生徒会に入っていたから、学校間の行事が何かだったんだろう。

ホツとして、気が抜ける。

なんでも疑い深くなっちまった俺…。

いや、待て！

教師だからって“白”とは限らない。そもそも俺はシンの顔も歳も知らないんだ。

「まさかとは思っけど…」

携帯に登録されている“シン”にかけてみる。
出るなよ…。

ブルルル　ブルルル

2コール

3コール

『もしもし？』

出た…。

カオルの前に立つ教師は電話に出た。アイツが…“シン”。

「よおシン」

『どうした？』

「いや、たいした用じゃないけど、近々会えねえ?」

『え?』

シンはカオルから顔を逸らした。電話の声が聞こえないようにしているようにも見える。

『ああ、いいけど、いつがいい?』

こういうことは、できるだけ早い方がいい。

「そうだな、今日これからってのは?」

『これから!? いや、ちょっと今日は駄目だ。今日はずっと立て込んでて、スマン。こっちからまたかけ直すから』

「ああ、そっか。ワリ、じゃあな」

『ああ』

“今日はずっと立て込んでて”…、それはカオルと大事な話ってことだよな。

まあ、話の内容なんてどうだっていい。カオルとシンが会っていた。理由なんて判らないし、知る必要もない。

少なくとも、シンを知らないと言ったカオルは、俺に嘘をついていたことになる。

くそう…、いったい何がどうなってるんだ。俺は誰を信じればいいんだ…。

第四話 5

翌日、俺は昼休みになるとすぐに三年の教室に向かった。

そして教室からアイが出てくるのを確認すると、前に立ち道を塞いだ。

「ちよつと何？」

怪訝^{けげん}そうな顔をするアイと、周りの興味本位な人達の視線も気に食わなかったので、俺はアイの手をとった。

「ちよ、ちよつと！」

「場所を変えよう」

半ば強引に連れ出した。アイのご機嫌を窺っている余裕はない。

それよりも…、カオルが俺に嘘をついていた。少なくともアイはそのことについて何か知ってるハズだ。

とにかく今はできる限りの情報を聞き出して、自分で真実を見極めるしかない。

この前、河原でアイに呼び止められた時、アイは俺に何かを伝えようとしていた…。それなのに俺はちゃんと話しもせず、揚げ句の果てにアイを避けた。

その結果が今の状況だ。

屋上までアイを引っ張って、そのことを正直に話した。

「橘が余計なこと喋ったのね」

「え、橘？ ああ、あのバイクの」

「まあ、そういうことなら話さないでもないけど、ここじゃあね…」

今の時間は、屋上でお昼を食べようと生徒がどんどんやってくる。

「確かに」

「今日の放課後、あの河原に来て」

「え、でも俺、今日は…」

昨日も一昨日も色んなことがあったので、今日こそはユウと帰らないと。

もちろん口に出して言うことではないが、急に振られた為、口ごもってしまった。

「別に邪魔する気はないわよ。あまり時間も取らせないから。森戸さんの部活がおわる前に学校に戻ればいいんでしょ？」

「え、や、別に何も言っていないだろ！ わ、判った、放課後な」

見透かされてるのが妙に恥ずかしく感じて、俺は逃げるようにその場を去った。同時に俺と入れ替わるようにユウとカオルが屋上に入ってきた。

「よっ、キリオー！」

カオル…、いつもと変わらない。

「ユウ、今日いつものところで待ってるからな」

「うん」

ユウはカオルのやってること知ってるんだろうか？

いや、知ってるも何も別に悪いことしてるわけじゃないか…、いいや、それもまだどっちか判っていない。

「コラ、キリオ！ アタシは無視かーコラー！」

放課後、俺が河原に着いて少ししてからアイが現れた。

「下に降りるか？」

高架下の方が人気がなくて話し易いだろう。

「ここでいい。車も通るし人も通る。内緒話は雑多な方がいいですよ」

「変な理屈だな」

それからアイは真実を話すと言った。別に信じるも信じないも俺次第でいいと。

当たり前だ。アイの言う事だって簡単に信用する気はない。あくまで判断は自分でする。

第一、アイは俺の記憶がなくなっていることを知っていたんだ、記憶を消した張本人って疑いが消えたワケじゃない。

時間は取らせないと屋上で言われた通り、話は手短だった。
アイから聞いた衝撃の事実。

「貴方の記憶がなくなったのは一度だけじゃないのよ」

「！……まさか、そんなことってあり得るのか！？」

「はい、話は終わり。さっさと森戸さんのところ行ってあげなさい」

アイは俺に背を向け早々に帰ろうとした。

「待てよ！ そんなんで“そっか”って納得するワケねえだろ！」

俺はカッとなってアイの肩を掴んだ。振り向いたアイの顔は怖いほど真剣だった。

「痛い。手、放して」

「ああ…、ごめん」

アイは半身のまま、長居する気はないといった姿勢で話した。

「手短に話すって言わなかった？ 森戸さんが待ってるんでしょ？」

「だからってあんな中途半端な話があるかよ！」

アイは溜め息をついた。一昨日のあの溜め息と同じだ。

これだ…、自分だけ何もかも判っていて、俺が理解していないのが

もどかしいとでも言いたいような…。だったらキッチンと話せよ。
そんな俺の苛立ちは、きつと顔にも出ているだろう。別に隠す気も
そんな余裕すらない。

「私の言ってること理解できてる？」

アイの方も少しイラ立っている。

「だからオブラートを使うな！」

「まったく、細かい説明させないで。私が知ってるだけで貴方は二
度記憶をなくしている。これが尋常じゃないってことは判るわよね
？」

二度…

「つたりめーだ」

「真実を知るとは同時に痛みを伴うの。貴方にその覚悟がある？
…いいえ、オブラートはやめるんだったわね」

アイは言葉を言い換えた。俺に気を使って言葉をよく選んでいたの
が判る。

なんだよ、そんなに“知りたい”って思いは短絡的だって言いたい
のか。

「真実を知る痛みっていうのは…、つまり、今の貴方を取り巻く環
境が壊れてしまう可能性があるって言ってるの。だから貴方の友人
や恋人…、森戸さんの為にも、何も聞かずに帰れって言ってるのよ
！」

手短に…、それは真実を知らずに日常に戻ることが前提の話だ。
逆を言えば、真実はちよつとやそつとじゃ語りきれないってことか。
それ相応の…、今の日常に引き返せなくなる覚悟がなければ聞く権
利もないと…。ユウが待つてゐるから今度とか、そういう次元じゃな
いってことだ。

「ちよつとした脅迫じゃねーか」

「そ？」

アイは軽く答えると、少し話の視点を変えた。後になって思えば、
それは俺をこれ以上踏み込ませまいとするアイ自身の希望だったの
かもしれない。

「ねえ、ちよつと考えてみて。今の生活に満足しているなら、何も
過去の記憶を知る必要はないんじゃない？　そもそも不都合ってあ
るの？」

「不都合？　いや、別にそんなもんはないけど、ただ気になるって
いうか…」

アイが俺の曖昧な台詞を遮った。

「どうしても真実を知りたいって言うのなら、協力してあげないで
もないわ」

「え」

「例えばとっても大事なことを教えてあげる。貴方が今後記憶を失う

心配はないわ」

「なっ…！」

「いったい…！？ アイは何をどこまで知ってる？」

「だいたい何者なんだ？ ここまで断言できるってことは、記憶操作の関係者なんじゃないのか！？」

「俺はアイの言ってること自体、鵜呑みにしていいのか…？」

「なんでそんなこと判るんだ！」

「質問しないでっ！」

「な、そっちが…」

「言ったでしょ、覚悟の問題！ 今の生活を大事にしたいなら帰れって言ってるの！ これは貴方一人の問題じゃない！ それでも真実を知りたいっていうなら…、森戸さんのところへは行けなくなるわよ！」

「アイはすごく思い詰めた顔をしていた。たいして働かない俺の勘だけど、その表情と言葉に嘘はない気がした。始めにアイが言っていた通り、どうするかは俺次第ってことだ…」。

正直、過去の記憶に興味はあるが、あくまでも興味レベルの話だ。今の生活を壊してまで追求する勇氣はない。

「アイの言うことがもし本当なら、もう俺が記憶を失うことはないんだ。」

「だとしたら、やっと落ち着いたこの平穏な生活に、過去のしがらみを持ち込むことはない。」

大事なことはなんだ？　今の俺にとっての支えはなんだ？　励みはなんだ？

ふとユウの顔が浮かんだ。

きつと一緒に帰ろうと言った俺を信じて待っている。どれだけ遅くなるうとも…。

間違っちゃいけない。興味があるからといって壊していいものじゃない。

―昔の俺と今の俺、気持ちをハッキリさせる必要があるんじゃないか―

いつまでも過去に縛られて、今見えてるものを壊しちゃいけない。失っちゃいけないんだ！

だから知る必要はない。俺はこれ以上深く関わるべきじゃない。自分の中で慎重に確認しながら考える。

こうというのが葛藤っていうんだろうな…。

「俺の決断は…、“過去を断ち切れ”だ！」

悩みに悩んだ末の決断。

アイはそれを聞くと、「そっか」と小さくつぶやいた。

あれ、なんだ？

「それじゃ、サヨナラ」

アイが始めて俺に笑顔を向けた。
笑顔なのに…なぜか、どうしようもなく切なくなつた。

どうしてだ…？ 胸がチクチク痛む。

本心では過去が知りたくてウズウズしてるのか？

いや、そんなことはない。散々考えた答えだ。
罪悪感？

何のだよ？ そんなものでもない。
じゃあなんだ？

これと似たような感じを…知ってる。これは…、そう、恋愛にみる
ような感覚、恋人達の仲を引き裂くような…、そんな痛み。
なんでアイに対してそんなことを思ふんだ？

俺は間違いなくユウのことが好きなのに。

この想いはいったい何なんだ？

これが…、これが過去の記憶だつていうのか？

遠ざかつてゆくアイをずっと見つめながら、言いようのない感情に
戸惑っていた。

その時、河原沿いから猫のキリオが飛び出してきた。

お世辞にも人なつっこいとはいえない奴だが、ここにいる俺でもな
く、あれから世話を続けているユウでもなく、アイの足元にすりよ
つた。

俺は、何か大事なことを見落としていないだろうか…。

ふとユウとの会話が頭に思い浮かんだ。

あの猫の名前…、

『やつ、私じゃないよ！』

『ただの偶然だろうけど、たまたま“キリオ”って呼ばれてるの聞

いて…』

ユウではない誰かが、猫に俺の名前をつけていた。

まさか、アイが…？

だとすれば俺が“過去を断ち切れ”と言ったのは…、目の前にいる…。

なんてこと言っただ俺は！ それじゃあ駄目に決まってる。同じことだ、今見えてるものを壊すことになる。

今がどんなに良くて、過去を知らなくていいことなんかないっ！今の生活を守るなんて言ったところで、それは所詮、俺と俺の周りまでの話だ。

これまでに俺が関わってきた他の人の人生まで、今の俺が決断していいわけじゃないか！

気が付くと既に足が動いていた。アイの元へ。

「待ってくれ！」

アイはこちらに振り向くことなく足を止めた。

「まだ何か用？」

「話を…、話を聞かせてくれ！」

その言葉に反応してアイが振り向いた。

ブブブブ…

同時に携帯のバイブが振動した。

俺の様子を見て、アイもそれに感付いたようだ。

「出たら？」

「ワリイ」

俺は携帯を取り出した。着信はユウからだった。まだ部活がおわるには早いはずだ？

「もしもし？」

それはカオルが突然いなくなったという連絡だった。

アイは何だかやりきれないといった表情を見せ、「日を改めましょう」と言った。

俺もそれに了解し、今はユウの元へ急いだ。

カオルは部活中のユウを急に呼び出したらしい。

そして留学の話を切り出した。留学って何だよ！？ ユウは前々から聞いていたらしいが、その予定がだいぶ早まったらしい。

今から飛行機に乗るから見送りもいいよって、携帯も海外用のじゃないから使えなくなるって、そう言うって行ってしまったと。

そして、どうしていいか判らなくなって俺に電話をかけてきた訳か。

「ねえ、どうして！？ キリオ、カオルどうしちゃったんだろ？」

「さっぱり判んねえ。急過ぎるだろ、しかもなんで今日なんだ？ 昼間会った時だって全然いつもと変わらなかったじゃないか…」

それはユウにとっても同じか…。ショックだったに違いない。二人は親友だったのだから。

今もユウは泣き続けている。気付けば部活に出てた格好のまままだ秋になったばかりとはいえ夕方は冷える。

「ユウ、とりあえず着替えてきな」

「…うん」

さつきは…、カオルの消えた理由が判らないって言うてごまかしたが、どう考えてもこの数日の出来事が絡んでいるとしか思えない。想像以上に俺とアイは触れてはいけないところまで踏み込んでいたってことか？

だとしたら…、ユウを巻き込んではいけない。

幸い付き合ってたまだ日は浅い。

ユウが戻ってきたら伝えないといけない。こういった話は先延ばししてもいいことはないのだから。

「いや…、今日は駄目だ」

親友と恋人を同時に失うのはあまりにも酷だ。

俺は言葉を飲み込み、戻ってきたユウを落ち込まないよう慰めながら帰った。

#つつく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2921w/>

記憶がないっ！

2011年11月4日08時07分発行